

日本中東学会ニューズレター

JAMES
NEWSLETTER



No.152
2018/9/11

目 次

理事会・総会報告	1
第 34 回年次大会報告	10
第 35 回年次大会の開催について	33
第 24 回公開講演会のお知らせ	34
『日本中東学会年報 (AJAMES)』編集委員会報告	34
第 5 回中東研究世界大会 (WOCMES Seville 2018) への参加について	35
寄贈図書	36
会員の異動	37
連絡先をご存じないですか	38
事務局より	39
編集後記	39

理事会・総会報告

【2018 年度第 1 回理事会報告】

日時：2018 年 5 月 12 日（土） 9:00～12:30

場所：上智大学四谷キャンパス 2 号館 615a（総合グローバル学部会議室）

出席者：赤堀雅幸、大稔哲也、粕谷元、勝沼聡、栗田禎子、黒木英充、近藤信彰、
桜井啓子、東長靖、長沢栄治、保坂修司、森本一夫、山岸智子、横田貴之

欠席者：末近浩太、森山央朗、山口昭彦（委任状あり）

〔議題〕

1. 学会ホームページの改修予定について承認した。
2. 2017年度事業報告・2017年度決算報告を承認した（詳細は総会議事録を参照）。
3. 2018年度事業計画・2018年度予算案を承認した（詳細は総会議事録を参照）。
4. AJAMES 編集について報告と説明があり、投稿規定改定を含め承認した。
5. 第 24 回公開講演会の開催企画を承認した。
6. 第 35 回年次大会の開催校を承認した。
7. 2018 年度韓国中東学会年次国際会議参加者に対する同学会からの旅費補助への対応について議論の上承認した。
8. 第 5 回中東研究世界大会（WOCMES Seville 2018）への 2 パネル構成員の派遣と経費補助を承認した。
9. 第 12 回アジア中東学会連合大会（AFMA）の開催地が北京となるとの報告があった。
10. 日本哲学会による第 25 回世界哲学会議（2023 年）の東京招致活動への協力を承認した。
11. 人文社会科学系学協会男女共同参画推進連絡会と日本学術会議第 1 部総合ジェンダー分科会が共同で行う人文社会科学系研究者の男女共同参画実態調査への協力を承認した。
12. 総会議事次第および資料を確認した。
13. 会員動向について報告があり承認した。

【日本中東学会第 34 回年次総会報告】

日時：2018 年 5 月 12 日（土） 17:00～18:00

会場：上智大学四谷キャンパス 6 号館 3 階 307

出席：当日出席者 63 名、委任状提出 126 名、計 189 名

（会員総数 713 名に対する総会定足数 5 分の 1（143 名）を満たしたことにより、総会成立）

1. 司会および総会役員の選出

奈良本英佑会員の司会により、議長として飯塚正人会員、書記として長岡慎介、千葉悠志両会員、議事録署名人として吉村貴之、佐々木紳両会員を選出した。

2. 2017 年度事業報告および決算

第 17 期各担当理事より、総会資料に基づく報告があった。

(1) 事業報告（報告：勝沼聡事務局長）

- ・ 第 33 回年次大会を、2017 年 5 月 13～14 日に、九州大学箱崎キャンパスにおいて開催した。
- ・ 公開シンポジウム『元寇』とイスラーム：モンゴル帝国の拡大がもたらした社

会変革と中東」

- ・ 企画セッション 4 本、研究発表 8 部会 49 本。
- ・ 韓国中東学会から CHOE Young-Chol 会長と KIM Suwan 理事を招待した。
- ・ 日本中東学会年報 (AJAMES) 第 33-1 号、第 33-2 号の編集・出版と頒布、電子ジャーナルとしての公開の手配を行った。
- ・ 海外研究機関他、国内外寄贈先への発送を行った。
- ・ 科学技術振興機構 (JST) の運営科学技術情報発信・流通総合システム (J-STAGE) においてバックナンバーの公開 (第 31-2 号まで) を行った。
- ・ 第 23 回公開講演会「中東の戦争と平和：ヒロシマから考える」を、2017 年 9 月 30 日に広島国際会議場中会議場 (広島県広島市) において、広島大学大学院総合科学研究科、広島大学平和科学研究センター、広島市立大学広島平和研究所、中国新聞社の後援を受け開催した。
- ・ 緊急シンポジウム「米大統領のエルサレム首都認定をめぐって」を、2017 年 12 月 22 日に東京大学東洋文化研究所において、東京大学東洋文化研究所班研究「中東の社会変容と思想運動」との共催により開催した。
- ・ 海外の関連学会との交流を促進した。
- ・ 第 33 回年次大会に、韓国中東学会から CHOE Young-Chol 会長と KIM Suwan 理事を招待した。
- ・ 2017 年 9 月 22～24 日に、韓国外国語大学 (大韓民国ソウル市) で開催された韓国中東学会主催の国際会議“Seeking Harmony and Prosperity for the Middle East in the Era of Uncertainty”に、黒木英充会長と勝沼聡事務局長、東長靖理事が招待された。
- ・ ニュースレター和文 4 回 (総頁 80 頁) を発行した。第 147 号 (2017/4/21、15 頁)、第 148 号 (9/30、年次大会特集、36 頁)、第 149 号 (11/30、13 頁)、第 150 号 (2018/3/13、16 頁)。
- ・ 会員名簿を作成、会員に配布した。
- ・ 第 6 回日本中東学会奨励賞の審査を同賞選考委員会において行い、竹村和朗会員の英文論考 TAKEMURA Kazuaki, “A Sales Contract: The Mechanism for the Private Ownership of Reclaimed Desert Land in Contemporary Egypt” *AJAMES* 31 (2): 207-236, 2015 (竹村和朗「売買契約書：現代エジプトにおける沙漠開拓地の私有の仕組み」『日本中東学会年報』) を選出した。
- ・ 『日本中東学会設立の頃：30 周年記念座談会 (2014) の記録』を刊行、全会員に加え海外研究機関他、国内外寄贈先への発送を行った。
- ・ 「日本における中東研究文献データベース 1989-2017」につき、新規業績などの調査・更新を継続し、学会ウェブサイトにおいて公開した。
- ・ 学会ウェブサイトの一部改修を行った。
- ・ 学会ウェブサイトおよび会員メーリングリストによる広報を行った。
- ・ 地域研究学会連絡協議会の参加組織として、地域研究の興隆を図るとともに、参

加組織の相互交流に努めた。

- ・ 日本学術会議協力学術研究団体として、他団体と連絡を取りつつ必要な活動を行った。
- ・ 会員の増減：2017年度中には入会者26名、退会者12名（すべて自主退会／賛助会員1件含む）の異動があった。その結果、2018年3月31日現在の会員数は713名（正会員548名／うち海外在住18名；学生会員165名／うち海外在住5名）となった。

(2) AJAMES 第33-1号、第33-2号編集報告（近藤信彰編集委員長）

- ・ AJAMES 第33-1号、第33-2号がそれぞれ2017年7月と2018年2月に刊行された。
- ・ 第33-1号では、論文2本、研究ノート2本、博士論文要旨1本が掲載された（投稿総数7本）。
- ・ 第33-2号では、論文2本、研究ノート1本、書評1本、博士論文要旨1本が掲載された（投稿総数12本）。
- ・ 平成29年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費（国際情報発信強化（B）））「アジアにおける中東研究のリーディングジャーナルとしての『日本中東学会年報』の国際情報発信強化」を申請し、採択された（期間5年。年額250万円）。

(3) 2017年度決算報告（報告：勝沼聡事務局長）

- ・ 総収入は、26,577,444円。内訳は以下のとおりであった。
- ・ 2016年からの繰越金が19,531,777円、年会費収入が4,060,000円、AJAMES 販売代金を含む、その他の収入が2,986,267円
- ・ 総支出は、26,577,444円。これによって総収入額と一致。内訳は以下のとおりであった。
- ・ 事務局費：1,573,550円、事業費：6,560,026円、2018年度への繰越金：18,443,868円。
- ・ 以上のうち、予算を大幅に上回ったもの（NL 発送費）についての言及があった。
- ・ また、前年度からの収支のズレについて、過年度修正差損として支出計上（73,512円）したことについて報告された。これについては、総会開催時点で原因は不明であり、今後調査を行うことになり、同日午前で開催された理事会で赤堀理事が担当理事に任命されたことが黒木会長より報告された。
- ・ その他、年次大会時託児所特別基金、学会奨励賞特別基金、年次大会特別基金の収支についても報告があった。

(4) 監査報告（報告：鈴木均監事）

- ・ 2018年5月10日に学会事務局（慶應義塾大学）にて、2017年度の会計監査を行った結果、適正に執行されたことを確認した。

<質疑応答>

(質問) ウェブサイト改修費に関して、2017 年度には 200 万円の使用が、さらに 2018 年度予算としてさらに 200 万円の予算が計上されている。合計額は、学会費一年分の会費収入に相当する大きな金額であるため、この点について詳細な説明を求める。

(保坂理事) デザインを過去のものから大幅に変更したウェブサイトが近く公開予定である。今回の改修によって、利便性や閲覧性、セキュリティが向上し、さらにスマートフォンでの閲覧への対応などが果たせる。委託会社は、編集事務支援、オンラインジャーナルや電子書籍、ホームページ制作などで実績のある杏林舎にお願いした。見積もりをとったうえで、同社の実績を考慮し、最終的に同社へと決定した。なお、文献データベースとの連動が古いため、その改善や、さらにセキュリティを高めるように依頼した。3 月末に杏林舎から提示されたウェブサイトには改善すべき課題がみられているため、また今後の SNS との連動などを鑑み、今年度は去年度と同様の額を計上している。

(質問) 新しいウェブサイトは、事務局で更新・変更を容易に行えるものなのか。

(保坂理事) 更新は可能であり、以前よりも容易になるだろう。ウェブサイトの改修の目的のひとつには、そうした事務局側の更新・変更の容易化の意図もある。

(質問) 年会費収入が、2017 年度予算と 2017 年度決算で大きく異なっているのはなぜか。また、2017 年度の収入と比べて、支出が多いように思われるが、この点について説明をお願いしたい。

(勝沼事務局長) 学会費納入状況が思わしくないことが主たる理由である。事務局では各会員の会費納入状況を予め調べ、それぞれの会員が何年分の学会費を未納であるかを調べたうえで、郵便振替用紙にその点を記載したうえで各会員に、学会費の納入を求めている。事務局としてできる限りの努力をしているが、それ以外の要因については今後詳しく検討していきたい。

(飯塚議長) 補足として、ニューズレターのオンライン化によって、郵便振替用紙の送付が年 1 回だけになったことも要因としてあるのではないか。

(質問) 過年度修正差損は、どのような理由で生じたものか。

(黒木会長) 原因については現在調査中である。

(質問) 発送費が、予算額から大幅に超過している理由を尋ねたい。

(勝沼事務局長) 2017 年度の発送費の予算は、前年度の発送費をもとに計上したもののだが、2017 年度には前年度には行っていない名簿の発送もあり、郵送物自体が多くなった。また、事務局の移転にともない、配送業者との大口割引制度なども今年度は利用が出来なくなったことも大きいものと見ている。今後は、どのような割引制度があるのかを検討したうえで、発送費の節約に努めたい。

<採決>以上の 2017 年度事業報告および決算報告について、総会はこれを承認した。

3. 2018 年度事業計画および予算

第 17 期各担当理事より、総会資料に基づく報告があった。

(1) 2018 年度事業計画（報告：勝沼聡事務局長）

- ・ 第 34 回年次大会を 2018 年 5 月 12～13 日に、上智大学四谷キャンパスにおいて開催する。
- ・ 日本中東学会年報（AJAMES）第 34-1 号（2018 年 7 月）、第 34-2 号（2019 年 1 月）の編集・出版と頒布、第 32 巻と第 33 巻の電子ジャーナルとしての公開の手配を行う。刊行にあたり、科学研究費補助金（研究成果公開促進費（国際情報発信強化（B）））の助成を受ける。
- ・ 第 24 回公開講演会を開催する。
- ・ ニュースレターを年数回発行する。年次大会報告号は紙媒体で発行する。
- ・ 「日本における中東・イスラーム研究文献データベース 1989-2018」につき、新規業績などの調査・更新を継続し、学会ウェブサイトにおいて公開する。
- ・ 学会ウェブサイトおよび会員メーリングリストによる広報を行う。
- ・ 学会ウェブサイトの改修作業を進める。
- ・ 海外の関連学会との交流を促進する。
 - ・ 第 34 回年次大会に、韓国中東学会から会長と理事を招待する。
 - ・ 2018 年度韓国中東学会国際会議に理事数名を派遣する。
 - ・ 第 5 回中東研究世界大会（WOCMES 2018、セヴィーリャ）に 2 パネルを派遣する。
 - ・ 第 12 回中東学会アジア連合大会（AFMA、北京）に理事等数名を派遣する。
- ・ 地域研究学会連絡協議会の参加組織として相互交流に努め、地域研究の興隆を図る。
- ・ 日本学術会議協力学術研究団体として、他団体と連絡を取りつつ必要な活動を行う。

(2) AJAMES 第 34-1 号、第 34-2 号編集計画、2018 年度編集体制（報告：近藤信彰編集委員長）

- ・ 現在、第 34-1 号の刊行準備を進めており、7 月に刊行予定である。（投稿総数 12 本、掲載 6 本）（論文 2 本、研究ノート 2 本、書評 2 本）
- ・ 第 34-2 号は 2018 年 6 月 1 日に投稿を締め切り、2019 年 1 月に刊行予定である。
- ・ 2018 年度の編集体制の変更はない。

(3) 2018 年度予算案（報告：勝沼聡事務局長）

- ・ 総収入は、26,546,618 円。内訳は以下のとおりである。
 - ・ 2017 年度からの繰越金：18,443,868 円、年会費：5,352,700 円、その他 2,750,050 円。
- ・ 総支出は、26,546,618 円。内訳は以下のとおりである。
 - ・ 事務局費：1,790,000 円、事業費：8,948,000 円、2019 年度会費分留保：2,872,700 円、2019 年度への繰越金：12,935,918 円。

- ・ 前年度と比べて支出が増加する項目は次のとおり。国際発信強化旅費（海外招聘）、国際発信強化旅費（海外派遣）、インターネット広報費。
- ・ 国際発信強化旅費（海外招聘）については、韓国中東学会からの招聘を2名から3名に増やすため。
- ・ 国際発信強化旅費（海外派遣）については、WOCMES および AFMA への会員および理事の派遣を想定しているため。
- ・ インターネット広報費については、当初実施予定の AJAMES 第 33 巻の J-STAGE 上での公開に加えて、昨年度未完了の第 32 巻の公開作業を行うため（粕谷理事からの補足説明）。
- ・ 前年度と比べて支出が減少する項目は次のとおり。ニューズレター等発行費。これは、昨年度行われた名簿の送付がないためである。

<質疑応答>

（質問）2018 年度への繰越金の額が 2017 年度決算表における額と一致していないように思われるが、この点に関しての説明をお願いしたい。

（勝沼事務局長）2018 年度への繰越金の記載に誤りが見られるため、（配布資料の）2017 年度決算表における 2018 年度への繰越金の額を、2018 年度予算案における 2018 年度への繰越金の額に反映する形で修正をお願いしたい。

（質問）AFMA 開催時期が分かっているのであれば教えてほしい。

（勝沼事務局長）北京での開催が予定されている。JAMES から AFMA 事務局へと問い合わせを行った 2018 年 4 月 3 日時点では、開催日時は未定である。

（質問）2018 年度予算では、前年度になかった「AJAMES 宣伝費」として 10 万円計上されているが、どのように用いるものなのか。

（勝沼事務局長）WOCMES にて AJAMES の宣伝を予定している。そのための予算として計上した。

<採決>以上の 2017 年度事業計画案および予算案について、総会はこれを承認した。

4. 会長挨拶（黒木英充会長）
5. 議事終了につき、議長の飯塚正人会員が降壇し、司会の奈良本英佑会員により閉会が宣言された。

2017年度決算

本会計

収入	17年度予算	17年度決算
2016年度よりの繰越金	19,531,177	19,531,177
年会費	6,914,400	4,060,000
正・学生会員	6,814,400	3,960,000
2014年度以前分	168,000	45,000
2015年度分	401,500	80,000
2016年度分	889,100	220,000
2017年度分	1,665,300	1,005,000
2018年度分	3,690,500	2,500,000
2019年度以降分	0	110,000
賛助会員	100,000	100,000
その他	2,750,050	2,986,267
科研費公開講演会助成金	0	0
科研費国際情報発信強化助成 利子	2,500,000	2,500,000
	50	43
AJAMES販売代金	250,000	290,320
海外郵送費実費	0	0
AJAMES広告費	0	0
NII-ELS著作権料	0	195,904
収入合計	29,195,627	26,577,444

(単位: 円)

2018年度への繰越金内訳	18,443,868
郵便振替口座	16,632,232
三井住友銀行口座	1,763,626
Paypal口座	24,954
現金	23,056

(単位: 円)

年次大会時託児所特別基金

費目	収入	支出
2016年度よりの繰越金	481,260	
本会計より繰り入れ	50,000	
利子	4	
託児所利用料	15,000	
第33回大会託児所運営費		97,992
振込手数料		432
2018年度への繰越金		447,840
合計	546,264	546,264

(単位: 円)

学会奨励賞特別基金

費目	収入	支出
2016年度よりの繰越金	2,105,537	
(片倉もとこ研究奨励基金を含む)		
奨励金		200,000
利子	339	
2018年度への繰越金		1,905,876
合計	2,105,876	2,105,876

(単位: 円)

支出	17年度予算	17年度決算
事務局費	1,860,000	1,573,550
アルバイト謝金	1,200,000	978,450
通信費	60,000	82,259
消耗品費	80,000	34,894
会議費	30,000	36,830
交通費	150,000	136,928
振込手数料	20,000	18,108
事務局備品費	150,000	111,432
事務局移転費	70,000	45,049
資料保管費	100,000	129,600
錯誤振込返金	0	0
事業費	9,080,000	6,560,026
大会開催費	400,000	400,000
大会会場費	200,000	114,000
AJAMES編集費	300,000	82,340
同欧文校閲費	550,000	0
同印刷製本費	2,100,000	1,387,908
編集委員会旅費	150,000	180,740
AJAMES宣伝費	0	0
30周年記念冊子作成印刷費	450,000	452,597
ウェブサイト改修費	2,000,000	2,000,000
国際発信強化旅費(海外招聘)	200,000	183,245
国際発信強化旅費(海外派遣)	400,000	0
国際交流費	150,000	9,072
ニューズレター等発行費	250,000	251,100
NL発送費	60,000	166,280
AJAMES国内発送費	150,000	83,776
AJAMES海外発送費	300,000	140,264
選挙費用	0	0
インターネット広報費	285,000	312,455
公開講演会開催費	830,000	435,079
中東・イスラーム文献DB更新費	100,000	200,000
地域研究会連絡協議会分担金	5,000	5,000
年次大会特別基金への繰り入れ	100,000	0
託児所特別基金繰り入れ	50,000	50,000
諸雑費	50,000	32,658
過年度修正差損	-	73,512
支出合計	10,940,000	8,133,576
2018年度への繰越金	18,255,627	18,443,868
総計	29,195,627	26,577,444

(単位: 円)

年次大会特別基金

費目	収入	支出
2016年度よりの繰越金	592,603	
利子	6	
大会実行委員会余剰金	45,976	
2018年度への繰越金		638,585
合計	638,585	638,585

(単位: 円)

2018年度予算
本会計

収入	17年度予算	18年度予算
2016年度よりの繰越金	19,531,177	—
2017年度よりの繰越金	—	18,443,868
年会費	6,914,400	5,352,700
正・学生会員	6,814,400	5,352,700
2014年度以前分	168,000	—
2015年度以前分	401,500	117,000
2016年度分	889,100	268,800
2017年度分	1,665,300	439,400
2018年度分	3,690,500	1,654,800
2019年度分	—	2,872,700
賛助会員	100,000	0
その他	2,750,050	2,750,050
科研費公開講演会助成金	0	0
科研費国際情報発信強化助成	2,500,000	2,500,000
利子	50	50
AJAMES販売代金	250,000	250,000
海外郵送費実費	0	0
AJAMES広告費	0	0
東洋文庫連携事業分担金	0	0
NII-ELS著作権料	0	0
収入合計	29,195,627	26,546,618

(単位: 円)

(参考) 各年度正・学生会員会費未納額および納付率

年度	未納額	前年度(2017年度) 納付率
2014年度分		8%
2015年度分	900,000	16%
2016年度分	1,280,000	21%
2017年度分	1,690,000	37%
2018年度分	3,940,000	41%
2019年度分	6,245,000	
合計	14,055,000	

上の表の見方は以下の通り

未納額: 本年度予算策定時点で在籍している会員の会費未納額
前年度納付率: 予算策定年度の前年度(たとえば2018年度予算であれば2017年度) 決算における会費納付額÷前年度予算に書かれている未納額

* 2018年度予算に書かれている各年度(2015～2019年度)の年会費収入予算は、各年度分の会費未納額(上記)に、その前年度分会費の2017年度における納付率(=2017年度決算における会費納付額÷2017年度予算に書かれている未納額)に5%を足した値を掛けることによって算出している

例) 2018年度分会費収入予算(2017年度分会費予想収入)
= 2018年度分会費未納額 × (2017年度分会費納付率 + 5%)

年次大会時託児所特別基金

費目	収入	支出
2017年度よりの繰越金	447,840	
本会計より繰り入れ	50,000	
利子	10	
第34回大会託児所運営費		120,000
2019年度への繰越金		377,850
合計	497,850	497,850

(単位: 円)

支出	17年度予算	18年度予算
事務局費	1,860,000	1,790,000
アルバイト謝金	1,200,000	1,200,000
通信費	60,000	60,000
消耗品費	80,000	80,000
会議費	30,000	30,000
交通費	150,000	150,000
振込手数料	20,000	20,000
事務局備品費	150,000	150,000
事務局移転費	70,000	0
資料保管費	100,000	100,000
事業費	9,080,000	8,948,000
大会開催費	400,000	400,000
大会会場費	200,000	278,000
AJAMES編集費	300,000	300,000
同欧文校開費	550,000	550,000
同印刷製本費	2,100,000	2,100,000
編集委員会旅費	150,000	150,000
AJAMES宣伝費	0	100,000
30周年記念冊子作成印刷費	450,000	—
ウェブサイト改修費	2,000,000	2,000,000
国際発信強化旅費(海外招聘)	200,000	300,000
国際発信強化旅費(海外派遣)	400,000	730,000
国際交流費	150,000	150,000
ニューズレター等発行費	250,000	100,000
NL発送費	60,000	100,000
AJAMES国内発送費	150,000	150,000
AJAMES海外発送費	300,000	300,000
選挙費用	0	150,000
インターネット広報費	285,000	440,000
公開講演会開催費	830,000	300,000
中東・イスラム文献DB更新費	100,000	150,000
地域研究会連絡協議会分担金	5,000	0
年次大会特別基金への繰り入れ	100,000	100,000
託児所特別基金繰り入れ	50,000	50,000
諸雑費	50,000	50,000
支出合計	10,940,000	10,738,000
2018年度への繰越金	18,255,627	
2019年度会費分留保		2,872,700
2019年度への繰越金		12,935,918
総計	29,195,627	26,546,618

(単位: 円)

年次大会特別基金

費目	収入	支出
2017年度よりの繰越金	638,585	
第34回年次大会運営費		100,000
利子	10	
本会計よりの繰り入れ	100,000	
2019年度への繰越金		638,595
合計	738,595	738,595

(単位: 円)

学会奨励賞特別基金

費目	収入	支出
2017年度よりの繰越金(片倉もとこ研究奨励基金を含む)	1,905,876	
奨励金(片倉基金より)		0
利子	300	
2019年度への繰越金		1,906,176
合計	1,906,176	1,906,176

(単位: 円)

第 34 回年次大会報告

【プログラム】

第 1 日：2017 年 5 月 12 日（土） 上智大学四谷キャンパス 6 号館
公開講演会

「十字軍と現代：ヨーロッパ、中東、そして日本」

私市正年 司会、趣旨説明

櫻井康人（東北学院大学）「ヨーロッパ史からみた十字軍」

太田敬子（北海道大学）「イスラーム史からみた十字軍」

松本高明（東京都立富士高等学校）「歴史教育における十字軍」

保坂修司（日本エネルギー経済研究所）「言説としての十字軍」

（共催）上智大学イスラーム研究センター

（協賛）上智大学総合グローバル学部

日本中東学会第 34 回年次総会

懇親会（2 号館学生食堂）

第 2 日：2017 年 5 月 13 日（日） 上智大学四谷キャンパス 2 号館
企画セッション（1～4）・個人研究発表（第 1～8 部会）

【企画セッション】

企画セッション 1：

「日本人アラビア語学習者の現状と課題：アラビア語教育のニーズとメソッド」

企画者：鷺見朗子（京都ノートルダム女子大学）

司会：依田純和（大阪大学）

Abdelrahman ELSHARQAWY（大阪大学）“Reflections on the Japanese Experience in Teaching and Learning Arabic”

鷺見朗子、鷺見克典（名古屋工業大学）「自己決定理論に基づくアラビア語学習動機

づけ：日本の大学におけるアラビア語専攻、非アラビア語外国語専攻、非外国語専攻学生の比較」

富永正人（東京外国語大学）「Proficiency からのアラビア語教育文法再考」

コメンテータ：福田義昭（大阪大学）

企画セッション 2：「日本国外でのアラビア語学習」

司会：依田純和（大阪大学）

岡崎英樹（四天王寺大学）「アラビア語教育における 4 技能とは何か：『ACTFL 熟達度評価指針』策定に至る議論から考える」

竹田敏之（京都大学）「現代アラブ世界におけるアラビア語教育の伝統：モータニアの文法学習を事例として」

Abdelrahman ELSHARQAWY（大阪大学）“Arabic Language Textbooks between Guide-

lines and Diglossia”

柴谷温子（慶應義塾大学）「外国語習得における学習者の『自律性』

企画セッション3：「紛争地における地域研究の方法およびその成果」

ファシリテーター・コメンテータ：青山弘之（東京外国語大学）

浜中新吾（龍谷大学）「世論調査による中東地域研究の回顧と展望」

高岡豊（中東調査会）「紛争下のシリアについての調査と課題」

山尾大（九州大学）「地域研究と政治学を架橋する：イラクを事例に」

企画セッション4：「現代イスラームにおける『伝統』の継承とジェンダー」

司会：長沢栄治（東京大学）

小野仁美（神奈川大学）「イスラーム改革思想家イブン・アーシュールの『シャリーアの目的』論：思想とその拡がり」

高橋圭（日本学術振興会）「現代アメリカにおける『伝統イスラーム』への回帰とジェンダー言説」

澤井真（京都大学）「男／女の解消：スーフィーの人間観」

後藤絵美（東京大学）「無意識の伝統主義：邦訳クルアーンとジェンダー」

コメンテータ：小林春夫（東京学芸大学）

【個人研究発表】 所属に付された「・院」は大学院学生を指す。

第1部会

LIN Cheng-Wei (Michigan State University) “Frequency Effect of Arabic Root Morpheme on Word Recognition”

アルモーメン・アブドール/Almoamen ABDALLA（東海大学）「アラビア語放送通訳のストラテジーとその手法に関する考察：アルジャジーラニュースの放送通訳を例に」

モハンマド・ファトヒー/Mohamed FATHY（東京都市大学）「アラビア語の『外の関係』の名詞修飾：『ふつうの内容補充』を中心に」

竹田敏之（京都大学）「現代アラビア語の休止形に関する伝統的規範と応用実例：半島方言とクルアーン読誦流派を中心に」

YUN Eun Kyeong (Hankuk University of Foreign Studies) “Study on the Sociolinguistic Situation in Egypt: Focusing on Arabic Diglossia”

第2部会

MURAYAMA Konomi (Tokyo University of Foreign Studies) “The Works of Ali Shariati and Their Intended ‘Readers’”

KOO Gi Yeon (Seoul National University) “The Cries of the Lioness: Iranian Women's Political Participation during the Green Movement 2009”

KIM Kangsuk (Dankook University) “South Korea-PLO Relations in Wake of the Camp David Accords”

Alena KULINICH (Seoul National University) “Justifying Wealth and Poverty by the Qur’an:

- Qur'anic Proofs in Hujaj al-Qur'an of Ahmad ibn Muhammad al-Razi (7th/13th Century)"
- KIM Donghwan (Hankuk University of Foreign Studies) "The Competition Law Regime in Islam: A Comparative Perspective"
- SIM Woohyang (Waseda University・院) "Higher Education beyond Occupational Attainment: A Case of Gulf Countries"
- YAMASHITA Yoko (Waseda University・院) "The Reconfiguration of Public and Private Spheres in Europe: Cases of Headscarf and Face-veil Bans"
- Sean FOLEY (Middle Tennessee State University) "To Go *with* the Grain: The Rise of Saudi Arabia's Modern Artistic Movement"

第3部会

- 岩坂将充 (同志社大学) 「トルコにおける『強い政治指導者』の出現とその構造的要因」
- 渡邊駿 (京都大学・院) 「21 世紀におけるヨルダン君主制の変容：ヨルダン体制中
枢エリートの通時的分析から」
- 佐野東生 (龍谷大学) 「イラン政治におけるシーア派思想の影響と実態：ハッサン・
ロウハーニー大統領の例から」
- 金信遇 (上智大学・院) 「現代チュニジアの地域構造に関する基礎研究：フランス保
護領期における人口の地域分布」
- 小林周 (日本エネルギー経済研究所) 「なぜ内戦後のリビアは安定しないのか：移行
政府の『正統性』への着目」
- 岡部友樹 (京都大学・院) 「仮想的人口動態と第二共和政レバノンにおける選挙制度」
- 白谷望 (愛知県立大学) 「モロッコにおける分断的政治領域の再生産：地域別投票行
動と政治意識」

第4部会

- 赤川尚平 (慶應義塾大学・院) 「イギリスにおけるイスラーム認識とオスマン帝国：
パン・イスラーム主義への対応としての『アラブ人カリフ論』」
- 池端路子 (京都大学・院) 「イスラーム国際世論形成とテロ問題：OIC の役割を中心に」
- 役重善洋 (大阪経済法科大学) 「パレスチナにおけるムスリム青年協会の設立と 1928
年エルサレム世界宣教会議への抗議活動について」
- 篠本創 (京都大学・院) 「湾岸地域に於ける米国のオフショア・balancing：ニク
ソン政権期」
- 西舘康平 (東京外国語大学・院) 「水の安全保障から遡るエジプトの安全保障の議論
の系譜」
- 向井智哉 (早稲田大学・院)、金信遇 (上智大学・院)、近藤文哉 (上智大学・院)、
松木祐馬 (早稲田大学・院) 「ムスリムへの受容的態度に対する情報提示の影響」
- 小島宏 (早稲田大学) 「2000 年代後半フランスにおけるムスリム移民 1 世・2 世若者
の宗教的飲食制限」
- 前田君江 (東京大学) 「ムスリム児童文学とファウズィア・ギラニ・ウィリアムズ

Fawzia Gilani Williams」

第5部会

- 平寛多朗（東京外国語大学）「チュニジアにおけるアラビア語文学史とワタニーヤ」
佐藤愛（京都大学・院）「未来の『パレスチナ』：在米ディアスポラ詩人スヘイル・ハンマードにおける‘home’と‘people’」
岡真理（京都大学）「カナファーニー・コード：ガッサーン・カナファーニー『ハイファに戻って』（1970）におけるいくつかの謎をめぐって」
飯野りさ（日本学術振興会）「シリア正教徒共同体における世俗歌謡と民族感情：音楽表現にみる故郷のイメージに着目して」

第6部会

- 竹村和朗（日本学術振興会）『期間の定めのあるワクフ』を作り出す論理：1946年法律第48号の第5条に関する議会論議の読解から」
佐藤友紀（東京大学・院）「エジプトの1923年憲法の制定過程にみる宗教と自由・国家」
沖祐太郎（九州大学）『戦争法』（カイロ、1872年）アラビア語版のテキスト分析：捕虜の取扱いに注目して」
勝畑冬実（東京外国語大学）「エジプト映画における『イスラーム主義』の表象：1995年から2010年までの作品分析から」
岡崎弘樹（中部大学）「カーシム・アミーン『女性の解放』の再検討」
登利谷正人（上智大学）「アフガニスタン内乱（1928-29年）におけるインド・ムスリム知識人の関与とその影響：ムハンマド・イクバルの事例を中心に」
松田和憲（京都大学・院）「南アジアのアフレ・ハディース派とシャー・ワリーウッラー一族のつながり：シャー・ムハンマド・イスマールイールの著作に対する評価に着目して」

第7部会

- 篠田知暁（日本学術振興会）「マーリク法学派におけるムスタグラク・アッ=ズィンマに関する学説の発達」
野口舞子（お茶の水女子大学・院）「12世紀前半マグリブ・アンダルスにおけるジハードのフトバの分析」
ハシャン・アンマール/Khashan AMMAR（京都大学）「啓典解釈学とハディース学から見たイスラーム経済の法学的論点：リバー（利子）とハムル（酩酊物）を中心に」
縄田浩志（秋田大学）「サウディ・アラビア紅海沿岸ジッダで販売される黒サンゴ製の数珠について」
亀谷学（弘前大学）「江戸後期貨幣図録の中のイスラーム貨幣」
相樂悠太（東京大学・院）「イブン・アラビー思想における『霊』（rūḥ）の概念」
山口匠（東京大学・院）「ムーセムとミハラジャーン：スィディ・アリ、ハマドゥシャ

教団における介入の試み」

近藤文哉（上智大学・院）「現代エジプトにおける『マウリドのアルーサ』の表象：新聞を分析の中心として」

第8部会

岡室美恵子（NPO 研修情報センター）、染矢将和（名古屋大学）「エジプト：アラブの春以降の混乱のマクロ経済への影響と変動為替移行」

足立真理（京都大学・院）「イスラーム的喜捨制度の現代的再構築：インドネシアにおけるザカート再定義と慈善団体の新実践の検討」

清水学（日本貿易振興機構アジア経済研究所）「経済制裁の政治経済学」

武石礼司（東京国際大学）「低炭素社会と中東産油国経済の将来」

ケイワン・アブドリ（神奈川大学）「イランにおける企業発展の歴史：大企業と支配的資本」

井堂有子（国際基督教大学）「均一化と階層化：エジプトのパン配給制度と改革、聖域としての『エイシュ・バラディ』」

田中雅人（東京大学・院）「オスマン朝末期からイギリス委任統治初期のパレスチナにおける在地地主の生存戦略：アルアラ村ムルヒム家文書から」

【公開講演会報告】

本講演会は、日本中東学会の公開講演会として開催された。テーマは、十字軍という歴史的出来事を通じて、ヨーロッパ世界とイスラーム世界とが屈折しながら今日に至っている過程を明らかにすること、その歴史的歩みの中に内包された誤解や偏見や敵意などを歴史と現状の両面から考えて見ること、そしてそこから明らかになる問題の多くが日本の社会にも投影されているのではないのか、という問題意識から設定されたものである。

報告と講演題は以下の通りである。櫻井康人「ヨーロッパ史からみた十字軍」、太田敬子「イスラーム史からみた十字軍」、松本高明「歴史教育における十字軍」、保坂修司「言説としての十字軍」。十字軍は誰もが知っているテーマであるので一般の人にもイメージしやすいこともあったようで、250 人程の聴衆が集まり、講演後の質疑も活発であった。

報告と質問の中から浮かび上がった問題点として、十字軍問題が一方向的に西欧キリスト教社会の問題として議論され、イスラーム社会や今日の中東諸国での関心の所在が明らかでないこと、日本の世界史教育を受けた生徒たちは豊富な歴史知識を持てば持つ程、十字軍にネガティブな印象を抱くこと、十字軍は近代以降に偏見や敵意の混じったイメージとして再構築され、負の価値が含意された他者概念として認識されるようになったこと、あるいは自己を正当化するスローガンとして使われるようになったこと、そしてそれが常識として社会の中に根づいていること、などが指摘された。最後に、西欧と中東・イスラーム世界との、複雑な歴史的背景を持った十字軍のような問題の解決は、一刀両断のもとに断ち切ろうとするのではなく、時間がかかっても

一本一本、ねじれた糸を解きほぐすような作業が必要ではないのか、とのまとめをもって講演会は終了した。(私市正年 大会実行委員・公開講演会担当)

【研究発表会場から】

企画セッション 1：日本人アラビア語学習者の現状と課題：アラビア語教育のニーズとメソッド

上記題目により企画セッション1が組まれた。司会は依田純和会員（大阪大学）、コメンテータは福田義昭会員（大阪大学）であった。企画趣旨としては、以下のとおりであった。日本の大学におけるアラビア語学習者は今世紀に入る頃から漸増しており、アラビア語の実用的能力の養成に対する期待は高まりをみせている。こうしたニーズに応えるために必要と考えられる日本のアラビア語教育と学習に関する研究は、いまだに不十分である。本企画セッションを、アラビア語学習者に関する3つの研究発表に基づいて、日本における現在のアラビア語学習の実態と課題を見据えることで、アラビア語教育の実践者として目指すべき方向性について意見を交わす場とした。

まず第1発表は鷺見朗子（京都ノートルダム女子大学）と鷺見克典会員（名古屋工業大学）による「自己決定理論に基づくアラビア語学習動機づけ：日本の大学におけるアラビア語専攻、非アラビア語外国語専攻、非外国語専攻学生の比較」であった。本研究では、アラビア語を学習する大学生を、アラビア語専攻、アラビア語以外の外国語専攻（非アラビア語外国語専攻）、外国語専攻以外の専攻（非外国語専攻）に区分し、アラビア語学習動機づけに関する比較を試みた。アラビア語学習の動機づけスタイルとして、3専攻のいずれにも「自律的動機づけ群」と「統制的動機づけ群」といった対照的な特色を示す2群が確認されるなどの結果が報告された。とりわけ、アラビア語専攻が自律性の低い「外的調整」において比較的高いという結果が意外であるという反応が会場よりあがった。

第2発表はAbdelrahman ELSHARQAWY 会員（大阪大学）が“Reflections on the Japanese Experience in Teaching and Learning Arabic”という発表を行った。目標、ニーズ、意図された学習成果（Intended Learning Outcomes: ILOs）、適切なアプローチ、学習教材、評価といった通常の評価方法を通じて、日本人のアラビア語学習経験を見つめ直すことは重要である。一方、このような学習プロセスに特徴的な要素を調査することも、極めて大切である。これらは、学習者が能力を高める助けとなっているにも関わらず、通常の授業時間の間には恐らく十分な取り組みがなされていない。本発表の主要な問は、「伝統的な時代遅れのアプローチが、いかに良い結果をもたらすことができるのか。何がこのような成果の助けとなっているのか」であった。アラビア語ネイティブスピーカーで日本のアラビア語教育に携わる発表者ならではの豊かな経験と鋭い感性が感じられる発表であった。

最後の発表は富永正人会員（東京外国語大学）による「Proficiency からのアラビア語教育文法再考」であった。この発表では、学習者のコミュニケーション能力習得のニーズに応えるべく、日本のアラビア語教育で教えられている訳読のための文法をProficiency の視点から見つめ直し、以下の3つの問いへの回答を試みた。まず学習者

が学ぶアラビア語の文法形式は、どのような言語機能や社会的文脈と結びつけられるか。次に、上記の文法形式や言語機能は、CEFR のどのレベルに位置付けられるのか。最後に、学習者の Proficiency 育成のため、文法の機能的な使用と規範的な使用をいかに区別するかである。現在の日本のアラビア語文法教育と、言語活動の遂行を重視する Proficiency 志向の教育との隔たりを埋めるには、文法シラバスの枠組みの見直しが必要であるという結果が導き出された。本発表には、日本のアラビア語教育においても大きな課題となっているであろうコミュニケーション能力と文法の融合について示唆に富んだ指摘が見られた。

3 つの発表の後、コメンテータから、このようなアラビア語教育に関する企画セッションが催されることについて、隔世の感があり、意義深いとの発言があった後、各発表に対する有益なコメントがなされた。日本人とアラブ人のアラビア語教育関係者が多く集い、報告で提起された問題について活発な意見交換が行われ、アラビア語教育研究の重要性をあらためて認識させる貴重な機会となった。（鷲見朗子）

企画セッション 2：日本国外でのアラビア語学習

本セッションでは、司会と第 4 報告者を務める予定だった近藤久美子会員（大阪大学）が急病で不参加となったため、司会とタイムキーパーを、第 1 セッションの司会を務めた依田純和会員（大阪大学）に引き続きお願いすることとなった。

まず、岡崎英樹会員（四天王寺大学）の「アラビア語教育における 4 技能とは何か：『ACTFL 熟達度評価指針』策定に至る議論から考える」では、1985 年に暫定版の採択された、ACTFL（全米外国語教育協会）のアラビア語の熟達度評価指針について、策定に向けた論点を整理した。当初はスピーキングとリスニングを口語で行う余地が残されていたが、現在のインターネット版では口語の記述がない。4 技能すべてを Modern Standard Arabic でとなれば、学習者の負担は減るものの、文化的・社会言語学的な真正性の問題が生じる。

次に、竹田敏之会員（京都大学）の「現代アラブ世界におけるアラビア語教育の伝統：モリタニアの文法学習を事例として」は、アラブ諸国のうち、特にモリタニアとエジプトで普及している伝統的文法教本についての説明に続いて、20 世紀のエジプトにおける文法改革を、実例を挙げながら具体的に解説し、日本人がアラブ諸国に留学した際に文法学習で直面する問題点を指摘して、例えばイブン・マリークの千行詩のような文法書を日本国内で学習しておくことの重要性や意義を述べた。

Abdelrahman ELSHARQAWY 会員（大阪大学）の「アラビア語の教科書：ガイドラインとダイグロシアのはざまで」においては、まず、アラブ世界のダイグロシアの問題、さらには地域ごとに口語が異なるという問題が取り上げられた。さらに、アラビア語教育／学習において、アラブ系の機関によって設定されたガイドラインのないこと、ACTFL や CEFR の基準はダイグロシア問題の解決になっていないことが指摘され、ガイドライン設定の必要性和、そうしたガイドラインに沿った教科書の必要性が強調された。

最後に、柴谷温子の「外国語習得における学習者の『自律性』」では、まず、先行研

究を参照し、言語喪失の要因と言語保持の因子についてまとめた。次いで、外国語／第二言語教育におけるコミュニカティブ・アプローチに続くパラダイム・シフトである「自律性」という概念を紹介し、その実践例などを提示。課題は残るものの、国外でのアラビア語学習を終えて帰国した学習者が、日本で学習を継続し、学習したアラビア語を保持、発展させるため、自律性の概念が重要であることを述べた。(榮谷温子)

企画セッション3：紛争地における地域研究の方法およびその成果

本企画セッションは、紛争下のイラク、シリア、レバノン、イスラエル・パレスチナの政治の実態解明を試みてきた研究者が、危険地での研究遂行上の困難を克服するため、いかなる方法を駆使してきたのかを、最新の研究成果と合わせて紹介するとともに、紛争後の中東における地域研究のありようを展望した。

報告者は浜中新吾会員（龍谷大学）、高岡豊会員（公益財団法人中東調査会）、山尾大会員（九州大学）の3名。各報告では、歴史研究型の情報収集・解読を軸とする質的アプローチに加えて、世論調査や計量分析といった量的アプローチを駆使した研究手法やその成果が示された。

具体的には、浜中会員が「世論調査による中東地域研究の回顧と展望」と題した報告において、紛争がもたらす政治意識の変容を捉える営為が現代中東地域にとって急務であることを強調したうえで、実験世論調査を導入した新たな研究手法とその成果を紹介するとともに、世論調査の技術的進歩と中東地域研究の革新を展望した。

次に、高岡会員が「紛争下のシリアについての調査と課題」と題した報告において、紛争下のシリアでの地域研究が直面してきた困難を示したうえで、一連の困難に対処するなかで、世論調査と聞き取り調査を駆使した研究の質と量がどのように漸進的に改善されていったのかを、今後の課題と合わせて明らかにした。

最後に、山尾会員が「地域研究と政治学を架橋する：イラクを事例に」と題した報告において、同会員が中心となってイラクで実施した世論調査の結果をもとに、紛争が人々のアイデンティティに与えた影響を検討するとともに、宗派・民族、政策志向、イデオロギー、社会階層といった要因の分析を通じて政党支持構造を解明した。

報告後の質疑応答では、量的アプローチに関する技術的な質問が多く寄せられたことから、質的アプローチと量的アプローチを併用する研究手法、とりわけ量的アプローチを導入することへの関心の高さ——良い意味での好奇心、悪い意味での拒否反応——を窺い知ることができた。(青山弘之)

企画セッション4：現代イスラームにおける「伝統」の継承とジェンダー

本セッションは、2016年4月に始まった「イスラーム・ジェンダー学の構築のための基礎的総合的研究」（通称「IG 科研」、代表：長沢栄治）に参画する研究者によって構成されたものである。目的は、ジェンダーの視点を通じた政治・社会・文化研究の再検討の一環として、現代イスラームにおける伝統とその継承のさまを具体的な事例を通して明らかにすることである。

最初の報告者の小野仁美会員（神奈川大学）は、20世紀チュニジアのイスラーム改

革思想家イブン・アーシュール思想におけるジェンダー観について検討した。彼は、イスラームの「伝統」を踏まえたクルアーン解釈において、男女の権利を同等であるとしながらも、男女の性別役割を固定化するジェンダー規範を示していること、そしてそれは、彼の依拠する「シャリーアの目的」論によって導かれた「家族」という近代的枠組みによって明確化されたジェンダー規範であることが明らかにされた。

二番目の報告者の高橋圭会員（日本学術振興会）は、20 世紀終盤からアメリカで興隆してきたスンナ派伝統主義スーフィー運動を取り上げ、この運動を牽引する宗教指導者ハムザ・ユースフの同性間の性行為に関する言説の分析をおこなった。本報告では、ユースフが同性間の性行為を違法とみなす一方で、「少年愛」についての過去の法学者の議論に依拠しつつもそれを脱文脈化することで、アイデンティティとしての同性愛を認める見解を提示していることが明らかになった。

三番目の報告者の澤井真会員（京都大学）は、スーフィズムの枠内で行われてきたジェンダー研究の流れに注目し、現代にいたるまでの動向を分析した。スーフィズムにおける女性を取り巻く環境について考察した最初期のイスラーム学的研究は、その後のジェンダー平等に関心を抱く論者たちによって参照されてきた。その背景として、論者たちは、スーフィズムの説く男女の平等がイスラームにおける女性の地位向上、そしてジェンダー平等に基づいたイスラーム法の変革のための有用な情報資源を提供してきたとみなしたのである。

最後の報告者の後藤絵美（東京大学）は、1920 年以来刊行されてきた邦訳クルアーンについて、男女の役割やあり方に関わる 4 章 34 節が、どのように訳出されてきたのかを比較検討した。その結果明らかになったのは、「学術性」担保のために古典宗教書に依拠し、かつ「宗教的中立性」を強調する訳書が、男性優位・男性上位のジェンダー観を示す傾向がより強かったということである。日本の教育や研究においては、学術性や宗教的中立性がしばしば強調されるが、後藤は、これがジェンダーについて「無意識の伝統主義」をもたらしている可能性を示唆した。

以上の報告に対し、コメンテーターの小林春夫会員と司会の長沢栄治会員からは、各報告のキーワードである「伝統」の中身に関する議論が提示された。報告者からは「伝統」という名で対象化されてきたものの自体を問うことが本パネルの狙いであったことが述べられた。（後藤絵美）

第1部会

第1部会の第1発表は LIN Cheng-Wei/林政緯氏（Michigan State University）による“Frequency Effect of Arabic Root Morpheme on Word Recognition（アラビア語の語根頻度による単語認識への影響）”であった。本発表は、グリーンバークが 1950 年に行ったアラビア語語根調査が土台になっている。グリーンバークはいくつかの子音の組み合わせがより頻繁に発生することを明らかにした。発表者は、ここから、辞書の見出しにある同じ語根のトークン頻度と実際の語用頻度を分析する必要があると考え、Aralex コーパスを用い、語根のタイプ頻度にくわえ、トークン頻度を対象に調査を行った。またカテゴリーカル知覚の有無と単語決定課題における認識への影響をも調べた。

午前中一番という時間帯であったこともあり、参加者は少なかったが、質疑応答では2、3の手があがった。

第2発表はアルモーメン・アブドラー会員（東海大学）による「アラビア語放送通訳のストラテジーとその手法に関する考察：アルジャジーラニュースの放送通訳を例に」であった。カタールのアルジャジーラ放送局によるアラビア語ニュースの日本語通訳が始まってから今年で15年になる。しかし、アラビア語チャンネルの通訳プロセスについてはこれまで考察がなされていない。そこで、発表者はアルジャジーラニュースの日本語通訳のストラテジーについて明らかにすることを目的とし、そのストラテジーに含まれる、編集的テクニック、情報の省略と圧縮、表現の統合・入れ換え、表現と情報の追加・再構成、また日本とアラブのジャーナリズムにおける修辞法の差異の調整などを論じた。興味深い内容であったが、機器の準備に手間取り、発表時間が少なくなってしまったことが残念であった。

続いて、第3発表のモハンマド・ファトヒー会員（東京都市大学）は「アラビア語の『外の関係』の名詞修飾：『ふつうの内容補充』を中心に」という題目で、日本語と対照したアラビア語の名詞内容補充表現について考察を行った。寺村（1975-78）の「内の関係」「外の関係」の類型がアラビア語の名詞修飾構造の分析に有用であることから、発表者は、寺村の言う「外の関係」の名詞の用法を日本語とアラビア語で検討した。日本語の先行研究で扱われている90名詞とそれに対応すると考えられるアラビア語116名詞を対象として、両言語間にみられる相違点を浮き彫りにした。ファトヒー会員は日本人でアラビア語の学習者が誤用する表現があることに気付き、本発表に至ったということなので、アラビア語教育現場にも、この成果をぜひ生かしてほしいと思う。

（鷲見朗子）

竹田敏之会員（京都大学）の「現代アラビア語の休止形に関する伝統的規範と応用実例：半島方言とクルアーン読誦流派を中心に」は、文末や句末で、格や法を示す母音を脱落あるいは長音化させた読み方である休止形をめぐる研究であった。まず、古典期の休止形について、さまざまな流派の読誦法の録音データも提示しつつ紹介し、文末などを短母音で終えることは、自然なアラビア語の発音でないことを示した。次いで、近代に入ってから、イウラーブ廃止論まで出た文法改革の動向に言及したのち、現代のメディア・アラビア語や非母語話者に対するアラビア語教育における語末の扱いについての問題を取り上げた。

初学者にとっては、アラビア語として不自然ではあっても、語末の母音までしっかりと読ませた方が効果的であろうということと、メディア・アラビア語では、いまだ文末の読み方に関する統一規範は確立していないが、これも規則や教本が必要であるという主張は、十分に説得力のあるものであった。

YUN Eun Kyeong 氏の“Study on the Sociolinguistic Situation in Egypt: Focusing on Arabic Diglossia”は、ダイグロシア研究に関するもので、平明な発表ではあったが、内容には目新しい情報を欠き、また「Diglossia 研究は、Spectroglossia 研究へ」と唱えたにもかかわらず、実例紹介が Diglossia 的、すなわち「エジプト方言では○○と表現するが、

フスハーでは××と表現する」といった対比に終始するものであった。そもそも、Spectroglossia という用語自体、M. H. Bakalla が 1984 年に提唱している用語であり、YUN 氏のオリジナルではない。この用語を使うなら、Bakalla の名に言及すべきだっただろう。(榮谷温子)

第2部会

午前の部、最初のふたつの研究報告はいずれも、現代イラン政治に関わるものであった。まず、村山木乃実会員(東京外国語大学)が“The Works of Ali Shariati and Their Intended ‘Readers’”を報告した。それは、1979 年革命の達成に関して多大な思想的影響を青年層に及ぼしたとされるシャリーアティー思想の全体像把握を、彼の想定した読者層に従い分析することを目指す内容であった。それに傾けた労力と意欲には目を見張るが、フロアからの質問と関連し、彼の革命思想分析と 3 つの想定読者層の思想内容の相互関係やメッセージ性への分析が未だ曖昧なままに残されていたことが残念であった。

第2報告は、KOO Gi Yeon 氏 (Seoul National University) による“The Cries of the Lioness: Iranian Women’s Political Participation during the Green Movement 2009”であった。報告では、立憲革命まで遡ったイラン人女性の政治参加の歴史を概観した後、報告者が 2009 年に長期に実施した現地調査で得た「緑の運動」女性参加者の声と知見を数多紹介し、大変意欲的な報告となった。本報告ではイラン政治への失望と「民主化」への彼女たちの希望が数多く紹介された反面、政治社会学的分析を加えることで、一層の研究の発展が期待された。いずれの報告にも 25~30 名程度が参加し、活発な質問やコメントが寄せられた。(吉村慎太郎)

第2部会午前の後半においては、KIM Kangsuk 氏 (Dankook University、以下 KIM K. 氏)、Alena KULINICH 氏 (Seoul University)、KIM Donghwan 氏 (Hankuk University of Foreign Studies、以下 KIM D.氏) により計3つの報告がなされた。

KIM K.氏はその報告“South Korea-PLO Relations in Wake of the Camp David Accords”のなかで、70 年代後半における韓国の中東政策の転換、特に PLO の承認が、2 度の石油危機 (1973、1979) によって規定されただけでなく、従来、北朝鮮と関係が深い PLO への接近による、中東外交の多様化の試みによるものである可能性を論じた。これに対し、サウジアラビアへの韓国の労働者力輸出や KAMES 設立の背景との関わり、また日本における展開との関連性等について活発な質疑応答がなされた。

KULINICH 氏の報告“Justifying Wealth and Poverty by the Qur’anic Proofs in Hujaj al-Qur’an of Ahmad ibn Muhammad al-Razi (7th/13th Century)”は、標題中の文献における蓄財と清貧の優劣をめぐる論争に着目し、それぞれの立場によるクルアーンの引用パターンや対象の章句およびその解釈の特徴にみる特徴を明らかにし、この問題に関する現代の議論に照らしたそれらの意義について論じた。質疑応答では、当該文献の性質やスーフィズムの影響、後世に対する影響等について多くの質問が寄せられた。

KIM D.氏による報告“The Competition Law Regime in Islam: A Comparative Perspective”は、預言者ムハンマドのハディースを通じた 7 世紀のアラビア半島における一定の取引慣

行の禁止を現代の独占禁止法の諸規定と比較し、その先進性の論証を試みると共に、イスラームにおける経済的公正の担保のためのヒスバ制度の重要性を論じた。これに対しては、イスラーム法の生成の歴史を考慮すべきであるとの意見が出たほか、ヒスバに対するローマ法の影響の有無や時代・論者による機能の相違等について関心が寄せられた。
(堀井聡江)

SIM Woohyang/沈雨香会員（早稲田大学）は湾岸諸国における高等教育の拡充と女性の進学、就業などに対する意識について報告を行った。本報告では高等教育を受ける女性が増加傾向にあるものの、女性の高学歴化と就業が直結しないのはなぜなのかという問いに対して約 1600 名への教育と就労に対する調査結果を踏まえ、教育に対する思い、大学進学、修士、博士号取得の目的、労働、結婚に対する意識などについて 20 数名へのインタビュー調査の成果をもとに、個々の女性の声を紹介しながら高学歴を志向する女性らの実情について報告が行われた。その結果、湾岸諸国の高学歴女性が必ずしも社会的、経済的地位獲得のために高学歴を志向しているわけではないこと、また高等教育と就業を直結してとらえる従来型の理論的枠組みではなく、湾岸諸国の社会文化的背景を考慮した新たな枠組みで高等教育と女性をめぐる現実をとらえていく必要があることが示された。

山下瑤子会員（早稲田大学）は西欧社会におけるヴェール規制に関する報告を行った。2001 年の米国同時多発テロ事件以降、西欧諸国においてはムスリム女性が着用するヴェール禁止法の成立が相次ぎ、ムスリム女性が公的空間においてヴェール、ニカブ、ブルカなどを着用することへの制限や禁止の拡大している。そうした動きを受け、本報告は西欧社会における公的空間と私的空間の再構成という枠組みのもと、フランスにおける禁止法を具体的に取り上げ、欧州人権裁判所、欧州司法裁判所のヴェール規制に関する判決についても言及された。それらを踏まえ、報告では西欧諸国は世俗主義・自由主義に基づく宗教理解のもと、公的空間における可視化された宗教的シンボルをコントロールすることによって、宗教の「正しい」場所を定義、管理しているとの結論を導きだしている。

Sean FOLEY/ショーン・フォーレイ会員（Middle Tennessee State University）は、近年のサウジアラビアにおける現代芸術運動をテーマとして、サウジのアーティストらが、現代アートなどの芸術作品、コメディ、映像作品などを駆使して、サウジの人々がこれまで公の場で表現しにくかったサウジアラビア社会に内在してきた社会、文化的な問題をサウジの国家や政治システムといった体制と対峙しない形で、洗練された手法で表現、サウジ社会において広く支持されている現状について報告を行った。報告者は、こうしたサウジの現代芸術と体制との調和について“to go with the grain”と表現、近年、サウジでもインターネット上での映像視聴が進むなかで、YouTube がアーティストらにとって重要なプラットフォームを提供していることについて言及された。報告のなかでは「サウジにおける女性の自動車運転」問題をテーマにしたスタンドアップ・コメディアンによる *No Woman, No Cry* のビデオクリップが紹介されるなど複数の映像が紹介された。それにより現代サウジのアートは、芸術そのものとしてよりも、む

しろ文化、社会的な文脈のなかで人々の意識や経験が節合、表現された有機的で、かつダイナミズムをもつ存在として捉えられることが報告者によって示された。

(阿部り)

第3部会

早朝にもかかわらず、刺激的な報告と議論がみられた。岩坂将充会員（同志社大学）の報告は、指導者のパーソナリティを中心としたアプローチに対し、「大統領制化」の概念を援用した長期的・構造的な分析を紹介した。4つの構造的要因（政治・国家・メディア・社会集団の変化）と政府・政党・選挙の3要素をめぐる分析に対し、フロアからは軍の役割の評価、「法の支配」の問題、単独政権をめぐる一般化の是非などに関する質問が寄せられた。

次に渡邊駿（京都大学・院）会員による報告は、パレスチナ系住民とトランスヨルダン系住民の対立に注目しつつ、王宮長官と首相職をめぐるエリートの時系列的な分析により、一般的に指摘される「トランスヨルダン系による支配」という認識では不十分であることが指摘された。フロアからはエリート層の出身・経歴・家系をめぐる数値的分析に対する評価とともに、数的な処理の根拠に関する方法論的質問が寄せられた。

(北澤義之)

第3部会の3番目の発表は、佐野東生会員（龍谷大学）による「イラン政治におけるシーア派思想の影響と実態」であった。本発表は、イランのハッサン・ロウハーニー大統領（2003年～現在）の過去の演説・説教・論文等を分析し、彼の政治思想に、シーア派的な統治理念がどのような影響を与えているかを明らかにするとともに、彼が主導する内政・外交に、それがどのようにあらわれているのかを論じたものである。ロウハーニー大統領は、シーア派初代イマーム・アリーの『雄弁の道』（ナフジュ・アルバラガ）の重要性に繰り返し言及していることから、アリーの統治を理想としていることがわかる。統治体制については、ホメイニーが提唱した「法学者の支配」（ヴェラーヤテ・ファキーフ）の正当性を確信し、イジュティハードを重視しているが、一方で、選挙を通じた国民の政治参加の重要性も説くといったバランス感覚を持ち合わせているという。また、ロウハーニーが、英独仏・IAEAとの核交渉（2003～2005年）で対話路線を追求したことや、女性の就労を奨励するといった現実主義政策に関する紹介があった。

現職大統領の政治思想や政策に関する発表だったこともあり、参加者から多くの質問が寄せられた。ロウハーニーの政治思想と、彼が大統領として実施してきた政策との関連性について、さらなる説明を期待する声があった。

4番目の発表は、金信遇会員（上智大学・院）による「現代チュニジアの地域構造に関する基礎研究：フランス保護領期における人口の地域分布」である。本発表は、人口センサスを用いて、フランス保護領期から現在までの人口動態ならびに地域分布の変化を時系列的に分析したもので、現代チュニジアにおける格差を民族や宗教の相違に求める既存の研究に一石を投じることを目指したものである。発表では、チュニジアの人口変動、出生率の推移、地域ブロック別の人口割合の変動を示す様々な統計から、チュニジアの人口増加率は、1930-40年代、1970-80年代の二度、急増しており、

その時期にチュニスへの人口集中が発生していること、中東部（サーヘル）の人口比重は、保護領期初期と現在ではあまり変化していないこと、保護領初期には中規模以上の都市が各地に分散していたが、独立後、チュニスと一沿岸都市に人口が集中しはじめ、1980年代以降、その傾向が拡大・固定したといった点が示された。参加者からはデータに基づく説明への評価と人口以外の要因を加味したさらなる研究を期待する声があった。（桜井啓子）

小林周会員（日本エネルギー経済研究所）は、内戦後のリビアの不安定性の原因について「正統性」が確立しているのかどうか、という点に着目して報告をした。2011年のカッザーフィー政権崩壊後、リビアには「国民暫定会議」「国民議会」「代表評議会」「国民合意議会」の4つの移行政府が設立されたが、いずれも外部主導で設立され、国際社会における「承認」を正統性の源泉としていたため、リビア国内における諸勢力間のパワーバランスやコンセンサスをほとんど反映しておらず、秩序の提供者とも、問題の解決者ともみなされてこなかった。そのことが、内政後のリビアの諸政府に正統性が確立せず、政権は不安定のままである、との結論が導かれた。議論では、リビアの内側からの政治的正統性をどのように確立しうるのか、をめぐって活発な意見交換がされた。本報告は、今日的なリビア問題を政治学的に考察する課題を提供した興味深い発表であった。

岡部友樹会員（京都大学・院）は、レバノンの選挙制度に着目し、第一共和政、内戦期、第二共和制シリア支配期、第二共和制主権回復期の4度の選挙制度の改正とその結果を分析し、選挙制度の改正が「仮想的人口動態」というレバノン独特の政治制度とあいまって、政党の利益を反映したものであることを分析した。それを踏まえて、岡部会員は、これまでの研究が、選挙制度を、権力分有体制論に基づく紛争の再発予防のための制度として分析してきたのに対し、選挙制度は親シリア派「3月8日勢力」と反シリア派「3月14日勢力」の妥協による2大勢力維持のために機能し、選挙区の操作は現職維持とともに、市民社会や非宗派的な政党などの第三勢力の出現を妨げる役割をも果たしている、と主張した。議論では、従来の宗派主義から2大勢力形成の過程や選挙制度などについて活発な質疑が交わされた。本報告は、レバノン政治制度の分析に新たな視点を提示する重要な発表であった。

白谷望会員（愛知県立大学）は、独立後のモロッコにおける分断的政治領域が再生産される要因を、宗派や民族などの制度からではなく、選挙制度と選挙結果から明らかにしようとする報告を行った。すなわち、発表者は、多党制下での国民の投票行動と選挙区別の投票傾向を分析し、その結果、政治的志向として、公正開発党の支持率が高いのは政治的関心が低い地域であること、真正近代党や旧与党（PJ、USFP）の支持率が高いのは政治的意識が高い地域であること、カサブランカやフェスでは、投票率が低く、票が割れることなどを明らかにした。議論では、政治志向と社会経済的背景との関係や支持者の動員構造などについて活発な質疑が交わされた。本報告は、モロッコを事例にして、分断的政治領域の再生産と、選挙制度および選挙結果とを関連させることで、権威主義体制論の分析に新たな問題を提起した有意義な発表であった。（私市正年）

第4部会

赤川尚平会員（慶應義塾大学・院）の発表は、第1次世界大戦におけるイギリスの錯綜した対中東政策決定過程を、イギリス政府の一次史料（The National Archives）や日記・回顧録、および同時代の文献を用いて分析した成果を纏めた興味深い報告であり、積極的な質疑応答を喚起した。第1次大戦以前から継続してするパン・イスラーム主義への対応という文脈から、カイロ駐在のイギリス関係者によって推進されたアラブ人カリフ構想は、ポスト・オスマン帝国の地域秩序の正統性を担保するものとしてイスラームに期待をかけた政策であった。しかしながら、カリフの権力を巡るカイロのイギリス当局とハーシム家やイスラーム知識人との間に存在した認識の齟齬、イギリス本国・カイロ・インド政府間の錯綜した政策決定過程などにより実現には至らず、この失敗を通してイギリスはイスラームそのものへの関与を控える従来の政策へと回帰していったと赤川会員は論じた。

池端路子会員（京都大学・院）の発表は、イスラーム協力機構（the Organization of Islamic Cooperation、略称 OIC）のテロ問題に関する対応と国際機構としての役割を分析した興味深く且つ斬新な報告で部会参加者の興味を引き付けた。池端会員は、まず OIC の設立の経緯及び OIC 憲章の内容を紹介し、OIC の問題点を指摘した上で、国際機構としての OIC の意義を分析した。そこから、OIC 決議の「共通利益」と「非拘束的合意」に注目し、OIC 決議の意義は、イスラーム内部における世論の中から最大公約数的な公論を設定し、共通の問題意識、意志、利益を創出してそれを正統化することにあると指摘する。それを踏まえて、OIC の首脳会議におけるテロ問題に関する決議を歴史的に辿り、OIC 首脳決議の意義の分析がなされた。さらに OIC を積極的に利用したイスラーム国際世論形成する近年の動向も指摘された。（太田敬子）

役重善洋会員（大阪経済法科大学）の「パレスチナにおけるムスリム青年協会の設立と 1928 年エルサレム世界宣教会議への抗議活動について」は、昨年同会員がニューヨークのユニオン神学校の国際宣教協議会ライブラリーで調査を行って発掘した、1928 年にイギリス統治下のエルサレムで開かれた世界宣教会議へのムスリム青年協会等による同協議会あての抗議電報等の史料を分析し、その前年にカイロで結成されたムスリム青年協会のヤーファー支部等が設置されて、それまでパレスチナ人の政治闘争を主導してきたイスラーム・キリスト教協議会に代わってムスリム青年協会及びアミン・フサイニーによる新たなイニシアチブが生れていたことを指摘するものだった。残念ながら聴衆は多くなく、質問も少なかった。

篠本創会員（京都大学・院）の「湾岸地域に於ける米国のオフショア・balancing：ニクソン政権期」は、1960 年代中期以降、湾岸地域から英国が撤退するのに対して米国が代わって自国パワーを展開するのではなく、平時においてはニクソン政権期にはイランとサウジアラビアの「二本柱」に自国の影響力を保つ役割を求めたという主張を、当時の公文書や数量的データによって論証したものだった。聴衆は 10 名余で、「湾岸地域というより中東地域で、米国はイスラエルとイランを二本柱としたのではないか？」等の質問があった。

西舘康平会員（東京外国語大学・院）の「水の安全保障から遡るエジプトの安全保障の議論の系譜」は、エジプトにおけるナイル川の水資源確保に関する議論の系譜と、1970年代のイスラエルとの講和以降の国家安全保障論やアラブ民族安全保障論を紹介する中で、アラブ民族安全保障論の主導的論客であるハーミド・ラビーウの1984年の主著においてナイル川の水資源確保問題がどのように扱われているかを分析し、単に上流諸国との関係だけでなく、中東全域の国際関係を視野に入れてエジプトの安全保障における中心的問題と捉えているというものだった。聴衆はかなり多かったが、質問時間はあまり残されていなかった。（鹿島正裕）

第4部会の午後の最初の発表「ムスリムへの受容的態度に対する情報提示の影響」（向井智也会員（早稲田大学・院）、金信遇会員（上智大学・院）、近藤文哉会員（上智大学・院）、松木祐馬会員（早稲田大学・院））は、ムスリムに対する受容的態度を規定する要因を明示するため、女子大学生を対象として「イメージ変数」と「受容的態度」に従属変数とする階層的重回帰分析を行ったデータ解析の結果の報告であった。提示される情報の質より、提示された情報の解釈という主観的な側面に、より有意性があったとの結果報告がなされたが、「どちらでもない」といった質問項目の扱いも含め、質問の因子の妥当性、及び、調査協力者自体のバイアスなどに関連して質疑応答があった。精緻に数値化されたデータの分析が軸となっている報告であったが、分析項目・因子の検討に若干の課題があるかと思われた。

「2000年代後半フランスにおけるムスリム移民1世・2世若者の宗教的飲食制限」（小島宏会員（早稲田大学））は、フランスにおいて社会統合の指標としてとりあげられた宗教的飲食制限に対する各種の要因を明らかにするため、フランスで行われた調査の個票データに関して比較モデルを適用した分析結果を、宗教的シンボル着用の関連要因などと合わせて検討した結果の報告であった。本報告で使われている「再イスラーム化」、「ハラール」といった言葉の実質的な意味を含め、ムスリムアイデンティティの指標をめぐって質問があった。提示された一覧表のデータに関して、より詳しく説明があれば報告の意義がさらに理解されたかと思われる。

「ムスリム児童文学とファウズィア・ギラニ・ウィリアムズ Fawzia Gilani Williams」（前田君江会員（東京大学））は、シンデレラを敬虔なムスリムとして描いた『シンデレラ：イスラーム民話』の作者として知られるムスリム児童作家ファウズィアの作家活動の現代的意味合いについて、特に、『イードの物語』の内容の考察と分析、さらにその位置づけを通じて報告がなされた。この物語のモチーフと欧米の作品との類似性に関連して質疑応答があったが、結論は出されなかった。（藤井守男）

第5部会

第5部会午前の部では、文学および音楽をテーマに四つの発表が行われた。

まず、平寛多朗会員（東京外国語大学）の「チュニジアにおけるアラビア語文学史とワタニーヤ」は、1918年にチュニジアで刊行されたアラビア語文学史を取り上げ、それがアラブ・イスラーム勢力による征服以降の、チュニジアの文人たちによるアラ

ビア語文学の記述に特化している点に着目し、同時代の他のアラブ地域の文学史と比べて、ワタニーヤの傾向が前面に押し出されているという特徴を指摘した。文学史をナショナリズムとの関係から考察するという着眼点は興味深かったが、ワタニーヤとカウミーヤというナショナリズムの二つの方向性について、両者がせめぎ合い、重なり合う様子をより動的に捉えた方が良いように思った。

次に、佐藤愛会員（京都大学・院）の「未来の『パレスチナ』：在米ディアスポラ詩人スヘイル・ハンマードにおける‘home’と‘people’」は、パレスチナ難民三世でブルックリン育ちの英語詩人の作品を読み解き、今はまだ実現していないあらゆる抑圧から解放された home としてのパレスチナへの帰還と、様々な home 無き人々とのトランスナショナルな連帯への希求が表現されていると結論づけた。時間の制約もあって、ハンマードが自身を「黒人」と位置づけている点について十分な説明がなされなかったことが惜しまれたほか、「ディアスポラ」概念について、先行研究を参照しつつ、今後さらに考察を深めることが期待される。

続いて岡真理会員（京都大学）の「カナファーニー・コード：ガッサーン・カナファーニー『ハイファに戻って』（1970）におけるいくつかの謎をめぐって」は、主に、作品中に繰り返し出てくる一つの表現について、再考を促す内容であった。既刊の翻訳では「人間は問題を体現した存在なのだ」とされている部分に、「人間は一人ひとりが一個の大義だ」という翻訳をあてるべきではという発表者からの提起に対して、フロアからは異論も出たが、実際にこのアラビア語の原文は、簡潔ながらも著者カナファーニーがたどり着いた深い思索を内包しており、容易には読み解くことができない。英訳では“Man is a cause”で了解されてしまうことを思うと、アラビア語を日本語に置き換えることの難しさを改めて考えさせられた。

最後の飯野りさ会員（日本学術振興会）による「シリア正教徒共同体における世俗歌謡と民族感情：音楽表現にみる故郷のイメージに着目して」は、現在、その人口の多くが欧州や北米に居住するシリア正教徒の世俗歌謡について、その音楽的・言語的特徴および歌詞の内容が、どのように彼らにとっての「故郷（トルコ南東部およびその周辺のトゥール・アブディーン地方）」のイメージ喚起につながっているかを分析し、そうした世俗歌謡を受容・共有することで、民族集団としての経験・記憶を分かち合う「歌謡文化共同体」が形成されていると提起した。フィールド調査の成果を踏まえての音楽とエスニシティとの関係をめぐる考察には、フロアからも大きな関心が寄せられていた。いずれの発表も分野を越えて多くの聴衆を集め、活発な議論が交わされた。（山本薫）

第6部会

第6部会の第1発表と第2発表は、共に東京大学東洋文化研究所などが保有するエジプトの『議事録』を史料に用いた研究発表であり、近現代エジプトにおける憲法や法律を分析対象とする研究であった。

まず、竹村和朗会員（日本学術振興会）の報告は、現代エジプト社会におけるワクフをめぐる法制度上の変遷を取り上げ、「慈善ワクフ」と「家族ワクフ」という区分の法による明文化と、後者の廃止について論じた。この区分自体、歴史的な実態をめぐっ

て現在も論争が続いており、時代や分野を横断して多くの研究者が関心を持つことが予測され、今後の展開を期待させる極めて重要な発表であった。

次いで、佐藤友紀会員（東京大学・院）の発表は、1920-30年代のエジプトにおける国家と宗教との関係について、やはり議事録の分析を通じて迫るものであった。そこにおいては、イスラームと近代欧米流の「自由」との関係が、様々な観点から問い直された。より広い歴史的コンテキストから会場の質問が相次いだが、こちらも今後の研究展開を十分に期待させる発表であった。（大稔哲也）

沖祐太郎会員（九州大学）は、近代アラブ地域における国際法の導入のテストケースとして、ヘディーヴ・イスマール時代には出版された『戦争法』を分析した。本書は、前世紀末のナポレオンの占領から1882年のイギリスによる占領まで、エジプトの対外戦争が断続した時代を背景としている。

著者、C.P. ストーンは、米国の南北戦争にも従軍、その後、エジプト陸軍参謀総長となり、イスマールの命で本書を著した。原著はフランス語、アラビア語訳され、主としてF. リーバー（1800-1872年）の著作を出典とする。沖会員は、これらのテキストを比較。捕虜の資格として、リーバー版にある「公的な敵」（a public enemy）がフランス語の原著では、しばしば、単なる「敵」「un ennemi」、アラビア語訳でも“al-‘adou”と表現されているなど、微妙な相違を指摘。国際法導入期エジプトの法意識に関する興味深い報告だった。

エジプト映画ファンの多いこともあり、勝畑冬実会員（東京外国語大学）の発表時には会場が満席になった。「9・11」以後、「テロリスト」を「絶対悪」、対処策を唯一軍事力による「テロとの戦い」と決めてかかる単細胞の発想が支配的だった時代がある。だが、「テロリスト」はどのような社会的・家族的環境から、なぜ・どのように生まれるのか。エジプト映画が、この問いに多様なヒントを与えてくれることを、勝畑会員の報告は示した。

勝畑会員は、1971～2009年につくられた725本の内、あらすじを確認できた586本を分析、「テロ」に限らず、映画の中の「イスラーム主義」の描き方に着目、社会派／リアリズム、コメディ、サスペンスに大別。現代エジプト文化の一翼を担う映画が、イスラーム主義も超えて、ジェンダーや性も含む多様な問題をどのように扱っているのか、きわめて興味深い世界を紹介した。（奈良本英佑）

第6部会の第5発表は岡崎弘樹会員（中部大学）による「カーシム・アミン『女性の解放』の再検討」であった。岡崎会員の問題意識は、一部のフェミニストによるカーシム・アミン批判が彼を取り巻いていた思想史上の文脈を無視したものとなっていることにある。そこで氏は、カーシム・アミンの時代までのアラブ思想界における女性解放をめぐる「認識の歩み」を跡づけ、次にそうした歩みを踏まえた上で、ヴェール、一夫多妻制、西洋のとらえ方といった論点に即して自らのカーシム・アミン解釈を示した。「アミンへの断罪は歴史上存在したはずの思想的可能性を奪ってしまいかねない」というレジュメでの結語は、岡崎会員の問題関心を明確に示すもの

となっている。

続いて登利谷正人会員（上智大学）による第6発表「アフガニスタン内乱（1928-29年）におけるインド・ムスリム知識人の関与とその影響：ムハンマド・イクバルの事例を中心に」が行われた。登利谷会員は、デュアランド・ライン画定後、英領インドのパシュトゥーン諸部族・ムスリム知識人がアフガニスタンとどのような関係を持っていたのかという問題に関心がある。そのため、この発表では1928-29年のアフガニスタンでの反乱の際にムハンマド・イクバルが行った活動を追跡した。そして、イクバルが、アマーヌッラー、次いでアマーヌッラー亡命後に即位したナーデルに対し、募金活動を含む様々な活動を通じて支援活動を行っていたことを明らかにした。

第7発表は松田和憲会員（京都大学・院）による「南アジアのアフレ・ハディース派とシャー・ワリーウッラー一族のつながり：シャー・ムハンマド・イスマール」の著作に対する評価に着目して」であった。松田会員は、南アジアのスナ派ウラマーの間に19世紀後半に形成された「ウラマー集団（maslak）」の研究を行っている。そして今回の発表では、シャー・ワリーウッラーの孫シャー・ムハンマド・イスマールによる『信仰の強化』に対する位置取りという観点から、20世紀のアフレ・ハディース派が南アジア・スナ派の間で自らをどのように位置づけていたかを分析した。

第5～7発表は森本一夫（東京大学）が司会を担当したが、発表が一つずつ進み、主題が「中東」から「南アジア」に移っていくにしたがってフロアが寂しくなっていくのが印象的であった。もちろんさまざまな要因が絡み合っていることでは思うが、司会者もやや切なく感じた次第である。最終発表者などはさらに切なく感じたに違いない。（森本一夫）

第7部会

午前の部の前半では、2つの報告がなされた。第1の報告は篠田知暁会員（日本学術振興会）による「マールク法学派におけるムスタグラク・アッ=ズィンマに関する学説の発達」である。ムスタグラク・アッ=ズィンマ（要旨集ではムスタグリク）とは、不正行為により他人の財産権を侵害した者の財産に関する法規定であるが、報告ではその語義ならびに適用の実態が先行研究の批判と文献調査に基づいて明らかにされた。質疑応答では、用語の文法的解釈の妥当性や、同規定が当初の目的を離れて国家による財産没収の手段となる過程について活発な議論がなされた。

第2の報告は野口舞子会員（お茶の水女子大学・院）による「12世紀前半マグリブ・アンダルスにおけるジハードのフトバの分析」である。フトバは従来、そこに挿入される君主名に注目が集まり内容そのものには注意が払われない傾向にあったが、本報告ではフトバを当時の社会状況を明らかにするための重要な史料と捉え、事例としてカーディー・イヤード（1149年没）の対ムワッヒド朝ジハードに関するフトバが分析された。質疑応答では、フトバの文言が王朝の交代によって書き換えられた可能性などが指摘された。（小林春夫）

続いて第3の発表は、ハジャン・アンマール会員（京都大学）の「啓典解釈学とハディース学から見たイスラーム経済の法学的論点：リバー（利子）とハムル（酙酎物）を中心に」であった。アンマール会員の問題意識は、現代イスラーム経済に関わる諸問題においてイスラーム法の規定を適用する際に、法源としてのクルアーン、ハディースの解釈学の蓄積をいかに活用するかにある。そこで氏はリバーの禁止（無利子金融）とハムル（酙酎物）の禁止を題材に、これらがイスラーム社会成立期（7世紀以降）にいかに定められたのか、その過程をコンテキストに従って分析し現代イスラーム経済における禁止の理由を明確化した。フロアからはオスマン帝国時代の事例をあげ、初期イスラーム社会後の歴史的文脈のもとでも氏の方法論を適用する余地がある等の意見が寄せられ、今後の研究の展開として聴衆の関心を集めた。（松尾有里子）

縄田浩志会員（秋田大学）の「サウディ・アラビア紅海沿岸ジッダで販売される黒サンゴ製の数珠について」は、黒サンゴ製の数珠にかかわるジッダでの加工や販売などの調査報告であった。イスラームにおいて神の美称のジクルなどに用いられる数珠のうち、黒サンゴ製のものはユスルと呼ばれ、特に珍重される。歴代サウディ国王にも愛用されたユスルは、過去においてジッダ北方のジュハイナ族により独占的に採取、加工、販売されてきたが、現在ではエジプトやトルコからの製品輸入に頼っている。擦ると良い香りがすることから、「苦が剥がれて楽となる」というコーランの記述に重ねられ、巡礼の土産品としても人気が高い。その際の損傷を防ぐための銀などの象嵌が、デザイン的な魅力ともなっている。琥珀や象牙などの粒と組み合わせた数珠もあり、高価な商品であるため、ブラジルゾウゲヤシ製などの模造品、代替品も多い。

亀谷学会員（弘前大学）の「江戸後期貨幣図録の中のイスラーム貨幣」は、丹波福山藩藩主であった朽木昌綱（1750-1802）が編纂した『西洋貨幣』（1787）および『和漢古今泉貨鑑』（1789）に採録されたイスラーム貨幣（様式としてアラビア文字が中心となっているものとりあえず定義）に関する調査報告であった。前者は西洋の貨幣などの図版とその解説、後者は日本および中国の貨幣の図版とその解説であり、前者には4点の、後者には23点のイスラーム貨幣が採録されている。前者の4点は、オランダ東インド会社発行のものであり、後者の23点には、マラッカやベンガル、インド、イランなどの貨幣と考えられるものがある。イスラーム貨幣を含む図録に採録された貨幣の一部は、オランダの長崎商館長ティツィング（1745-1812）との親交によって、昌綱が入手したものであった。

両発表ともに参加者の関心に応え、かつさらなる興味を喚起する内容であり、幅広い視野からの質問が寄せられた。（松本弘）

第7部会の午後の部は、思想研究の発表1本、人類学の発表2本で構成された。

最初の発表者は相楽悠太会員（東京大学・院）で、「イブン・アラビー思想における『霊』（*rūh*）の概念」と題し、この偉大な神秘家の思想について、これまで十分に顧みられることがなかった「霊」概念を取り上げた。人間論、啓示論、修行論の観点から彼の「霊」概念を論ずる重層的な展開から、クルアーンの「霊」観念に強い影響を

受けつつ、先行するスーフィーの思想を踏まえ、「慈愛者の息吹」へと焦点を結ぶその「霊」概念が、彼の靈魂論に重要な位置を占めることを主張するとともに、今後の研究のあるべき方向性を示して発表を締めくくった。私自身を含め、聴衆にこの分野の専門家が多くはなかったのは残念だが、よく練り上げられた問題意識の高い発表であるとの印象を持った。

続く山口匠会員（東京大学・院）の発表「ムーセムとミハラジャーン：スイディ・アリ、ハマドゥシャ教団における介入の試み」は、治病儀礼で知られるモロッコのタリーカが実施する二つの祭礼、古くからあるムーセムと新規に行われるようになったミハラジャーンに関する調査から、両者が異なる性格付けをされつつ、ともにタリーカの当主の「介入」による新しい展開を見せており、そこに国家とタリーカの間で強化されつつある庇護と恭順の関係を見てとることができるとする一方、介入に抗うかの動きも同時に見られることを指摘し、聖俗の同居や聖性のあり方の問い直しがなされているとの展望を示した。充実した現地調査の様子がうかがわれる発表だが、全体の枠組みはなお整理の余地があるように思われた。事実関係をめぐる複数の質問の他、国家とタリーカの関係という点でエジプトやトルコとの事例との比較の可能性についての指摘などがなされた。

第7部会最後の発表は、近藤文哉会員（上智大学・院）が「現代エジプトにおける『マウリドのアルーサ』の表象：新聞を分析の中心として」と題する発表を行った。エジプト研究者にとっては、預言者生誕祭などで売られる砂糖人形として親しみのあるアルーサについて、近年のプラスチック製のアルーサの流行を始めとして文化遺産や民衆芸術としての位置づけ、またイスラームとの関係でアルーサを教えに沿ったものと捉える立場、反すると考える立場などを紹介して、アルーサの表象の多様性をまず明らかにした。その上で、今回はとくに1987年から2000年の『アハラーム』紙上で、預言者生誕祭の前後に現れ、生誕祭に触れた記事や広告の三分の一以上でアルーサへの言及が見られ、生誕祭とアルーサの結合がきわめて一般的であることを指摘し、さらに、ムバーラク元大統領がエジプト民衆を表す一つのイメージとしてアルーサを利用している例、また物言わぬ好都合な妻としてアルーサが戯画化された例について具体的に取り上げた。残念ながら、前者の例は誤読であり、また後者の分析に当たっては対象となった戯画の全訳を提示することが望ましかったなどの問題が指摘されたが、全般には預言者生誕祭などの事象に対する新しい意欲的な取り組みと評価する声が聞かれた。（赤堀雅幸）

第8部会

午前の部の前半では、岡室美恵子会員（NPO 研修情報センター）と染矢将和会員（名古屋大学）による報告「エジプト：アラブの春以降の混乱とマクロ経済への影響と変動為替以降」（配付プログラムから若干の変更あり）が行われた。1990年代から2000年代初めに管理変動相場制に移行したエジプトは安定した為替推移を実現したが、2011年の政変以降、政治的混乱に伴う経済状況の失調にともない、為替も下落し外貨準備も低下した。2016年に自由相場制とエネルギー補助金削減を条件としたIMFか

らの融資受け入れは、さらなる通貨安とインフレを引き起こしたが、現在ではインフレ率の低下と外貨準備の回復が見られるようになったことを各種統計データから示した。会場からはエネルギー補助金削減に対し、ゾフル・ガス田の開発などが税政に及ぼした影響や、為替の自由化に伴う輸出の全体量の増減、継続するインフレ状況の中で通貨安をもたらしている自由相場制が市民社会に与えている影響など、実体経済への影響を中心とした質疑が行われた。

続く足立真理会員（京都大学・院）は「イスラーム的喜捨制度の現代的再構築」と題して、インドネシアにおける近年のザカートをめぐる変革についての報告を行った。特に1998年スハルト政権崩壊の翌年に制定されたザカート管理法や、2001年の県単位で設立されていた公営ザカート組織をまとめた全国的な国営ザカート管理団体（BAZNAS）の創立と運営に主導的な役割を果たした知識人、ディディン・ハフィドゥッディンの著作と活動から、所得税などの世俗的な税とザカートの統合を目的に、カラダーウィーの理論やザカートを国家が徴収するマレーシアをモデルにザカート管理への国家介入の推進を目指す動きを紹介した。また、報告者が行ったジャワ島の第二の都市マラン市における調査データから、BAZNASとその下部組織のほか、貧困層の多い密集市街地での活動を行う地域規模の私営ザカート管理団体、富裕層からのザカート徴収を主たる活動とする大手の私営ザカート団体など、多くのファクターが同市内に混在する状況を示し、一方で各団体は競合関係ではなく、情報交換を通じて互いに活動を補完し合う関係であることが報告された。会場からは、マラン市のインドネシア内における経済的位置付けや、調査地としての特殊・一般性に関する質問のほか、各団体の具体的活動内容や範囲、ザカートを国家が徴収する国との比較など活発な議論が行われ、今後の研究の進展に期待が持たれた。（吉村武典）

清水学会員（日本貿易振興機構アジア経済研究所）の報告「非軍事的制裁措置の政治経済学」は、最近、高い関心を呼んでいるイランへの経済制裁の事例を中心にして「金融資本主義の第2段階」にある世界経済の中で、経済制裁の機能、とくに「二次制裁」の問題に焦点を当てた内容であった。会場からの質問ではトランプ政権のヨーロッパへのグリップはこれまで通りに有効であるか、などがあった。

武石礼司会員（東京国際大学）の報告「低炭素社会と中東産油国経済の将来」は、大手石油会社や国際機関による世界のエネルギー需給予測を詳しく紹介し、将来、国際収支の赤字化も予想される産油国の石油・ガス輸出依存からの脱却は可能かという問題を論じた内容であった。会場からの質問では、アメリカの石油輸出戦略との関係、ノルウェーの基金制度との比較、国内産業基盤の産油国の間の差異などがあった。（長沢栄治）

第8部会の第5発表はケイワン・アブドリ会員（神奈川大学）による「イランにおける企業発展の歴史：大企業と支配的資本」であった。イラン国内の大規模企業について、19世紀半ばから今日までの政府による産業政策と関連付けつつ、従来の国有資本、民有資本、外国資本といった枠組みにとどまらず「縁故資本」「特権資本」といったタームを

用いながらそれら企業の政治経済学的性格や資本来歴を定義した。フロアからは工業化以降のイランの産業資本の性質を構造的に捉えようとした野心的研究との評価、ならびに企業の株式の様態や法的枠組みについて追加的な情報を求める質問が出された。

第6発表は井堂有子会員（国際基督教大学）による「均一化と階層化：エジプトのパン配給制度と改革、聖域としての『エイシュ・バラディ』」であった。発表者は、エジプトにおけるパン配給制度をつうじて国民食となったエイシュ・バラディをとりあげ、製造・流通過程における政府による規制・介入政策が結果として、本来多様であったパン文化の均一化を招き、さらに補助金付きのエイシュ・バラディを主として消費する社会階層の存在を顕在化させたと論じた。製パンに関連する補助金対象物資の種類や、大量の輸入小麦の利用パフォーマンスなどについての質問をはじめとして、活発な質疑が行われた。

第7発表は田中雅人会員（東京大学・院）による「オスマン朝末期からイギリス委任統治初期のパレスチナにおける在地地主の生存戦略：アルアラ村ムルヒム家文書から」であった。オスマン朝期パレスチナのアルアラ村における在地地主ムルヒム家の私家文書を用いて19世紀後半から第一次世界大戦直前までの時期における同家の相続、資金の借入、現金収入の方途などについて分析し、これまで十分に光を当てられてこなかった中規模地主の主体的な経営と資産運用の実態が論じられた。質疑では、世界経済の動きと同家の生存戦略との関係性を論じるためにはこの時期の農業生産の水準や税制、農村部における金融制度の発達状況などについてより実証的検討が必要との有益なアドバイスが多くなされた。

いずれの発表においても20名前後の聴衆によって活発な質疑応答が行われた。

（岩崎葉子）

【第34回年次大会を終えて】

第34回年次大会は東京の上智大学四谷キャンパスで5月12日・13日に開催されました。

12日に行われました公開講演会「十字軍と現代：ヨーロッパ、中東、そして日本」は2年前に建設された6号館の新しいキャンパスの3階で行われました。講演会は大変好評で、会員以外にも一般の方々や学生など200名を超える多くの方々にご出席いただきました。特に、カトリックの大学である上智大学での講演会ということで、テーマが会場にふさわしいものであったこと、「十字軍」という古くて新しい問題を検討したことなどから多くの好意的なご意見をいただきました。講演会後に同じ会場で行われた総会では会員各位の活発な議論があり、学会の将来の発展を暗示させるものでありました。

懇親会は会場を変え、2号館5階で行われました。料理は中東を意識した材料やハラル・フードなども提供され、また中東諸国のワインも用意されました。曄道上智大学長の歓迎の挨拶や韓国中東学会メンバーの挨拶などの後、楽しい歓談のひと時を過ごすことができたと思っております。

2日目の研究発表においては、4つの企画セッションと8部会に分かれた約55件の

個人研究発表が行われ、最新の研究成果の披露とそれをめぐる活発な議論が行われました。刺激的な発表も少なくなく、参加者からとても好評を得ておりました。

このように、第 34 回年次大会は全般的には大盛況だったと自賛することができます。しかし、反省しなければいけない点がいくつかあったであろうことも事実です。

一番の問題は当日参加者数が予想しにくい点にあります。大会参加者は 240 名程度を予想していたのに対し、実際は 300 名弱の方の参加を得ました。また、懇親会参加者も 120 名程度を予想していたのですが、実際には 150 名ほどの方の参加を得ました。食事や飲み物が足りなくなるということはなかったようですが、参加者の数は予想外でした。こうした当方の予想以上のご出席をいただいたことが、たくさんの余剰金が出たことの大きな理由と考えております。学会員の皆様には、大会参加は期日内に事前申込くださいますようお願いいたします。なお、余剰金は全額日本中東学会事務局に送金致しました。

とはいえ、その他には大した大きな問題もなく無事に第 34 回年次大会を終えることができました。これもひとえに大会出席者の皆様のご協力の賜物と感謝している次第であります。どうもありがとうございました。(小牧昌平 大会実行委員長)

【大会決算】

日本中東学会第34回年次大会決算			
収入の部		支出の部	
大会開催費	(学会本会計より) 400,000	印刷代(レジュメ・要旨集等)	357,897
大会会場費	(学会本会計より) 277,800	デザイン代(ポスター)	22,274
大会参加費	(事前支払 203名) 203,000	郵送費(プログラム他)	126,402
	(当日支払 90名) 180,000	懇親会費(ワイン代を含む)	519,963
懇親会費	(一般事前支払 92名) 460,000	アルバイト代	146,000
	(学生事前支払 18名) 72,000	1日目お弁当代(委員・アルバイト)	18,000
	(一般当日支払 26名) 156,000	1日目パネリスト謝金	22,274
	(学生当日支払 13名) 65,000	2日目参加者お弁当代	45,000
お弁当代	45,000	2日目お弁当代・食料代(委員・アルバイト)	22,330
書店寄付・教室使用料(5店分)	20,000	錯誤入金返金	3,000
錯誤入金	3,000	消耗品費(文具代等)	10,641
銀行利子	1	振込手数料	216
		大会会場費	277,800
		余剰金(年次大会特別基金に繰入)	310,004
収入合計	1,881,801	支出合計	1,881,801

託児所決算			
収入の部		支出の部	
利用者負担	1日3000円×7人 21,000	託児所運営委託費	115,030
託児助成	50,000	余剰金(年次大会特別基金に繰入)	0
学会予算より補填	44,030		
収入合計	115,030	支出合計	115,030

第 35 回年次大会の開催について

2019 年度の第 35 回年次大会は、秋田大学が担当校となりました。日程は 2019 年 5 月 11 日(土)・12 日(日)の両日で、会場は秋田大学手形キャンパス(秋田市手形学園町 1 番 1 号)です。秋田大学での開催ははじめてとなります。最寄り駅は秋田駅(JR、秋田新幹線)、最寄り空港は秋田空港(JAL、ANA)です。秋田大学手形キャンパスは、

秋田駅からは約 1.3km（徒歩 20 分・車 6 分程度、秋田空港から秋田駅まではリムジンバスで 30 分程度）のところにあります。実行委員会を中心に講演会等をこれから企画いたします。どうぞご参集くださいますようお願い申し上げます。

（縄田浩志 大会実行委員長）

第 24 回公開講演会のお知らせ

2018 年度、第 24 回講演会の詳細が決まりました。

「若手中東研究者と語ろう！：現代中東における結婚と離婚」

日時：2018 年 10 月 6 日（土） 11:00-12:30

会場：横浜 YWCA 3 階ホール（150 名収容）

ゲスト：嶺崎寛子（愛知教育大学准教授）、山崎和美（横浜市立大学准教授）

司会：桜井啓子

進行：森本一夫

今回は、ゲスト 2 名をお迎えし、初めにエジプトとイランにおける結婚と離婚のリアルについて現地での見聞を交えながら語っていただき、その後は、会場からの質問に答えながら話を膨らませていくという形を試してみることになります。「結婚や離婚」といった身近なテーマを介して、参加者に中東をより身近に感じていただく、というのが狙いです。

（桜井啓子 企画担当理事）

『日本中東学会年報（AJAMES）』編集委員会報告

- ・ 5 月の理事会で、投稿規程の改定を行いました。電子図書館に関する付記を、現状にあわせて、科学技術振興機構の提供するそれに参加していることを明記いたしました。
- ・ AJAMES の創刊号（1986 年）から 31-2 号（2015 年度）までのバックナンバーの公開が J-STAGE において 2018 年 3 月 30 日より開始されたことについては、会員の皆様へのメール（4 月 1 日）および前号のニューズレターですすでにお知らせしたとおりですが、諸般の事情で公開が遅れていた 32 巻（2016 年度）の公開が 6 月 1 日から開始されましたので、ご案内申し上げます。
- ・ 34-1 号を 7 月に発行いたしました。
- ・ 34-2 号投稿論文の審査を行っております。投稿いただいた方には 8 月に入ってから、審査結果をお知らせいたします。
- ・ 35-1 号の投稿締め切りは 12 月 1 日です。欧文の特集を含め、皆様の御投稿をお待ち申し上げます。

本誌に関するお問い合わせ先、原稿投稿先は以下のとおりです。

〒183-8534

東京都府中市朝日町 3-11-1

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 近藤信彰気付

『日本中東学会年報』編集委員会

ajames-editor@james1985.org

(近藤信彰 AJAMES 編集委員長)

第 5 回中東研究世界大会（WOCMES Seville 2018）への参加について

2002 年にマインツ（ドイツ）で開催されたのを皮切りに、2006 年アンマン（ヨルダン）、2010 年バルセロナ（スペイン）、2014 年アンカラ（トルコ）で開催されてきた中東研究世界大会（World Congress for Middle Eastern Studies）に、日本中東学会は初回からパネル参加し、理事が開催地決定に参加するなど、大きく貢献してきていますが、その第 5 回大会が 2018 年 7 月 16～20 日にセヴィーリャ（スペイン）において Three Cultures Foundation of the Mediterranean の主催で開催されるはこびとなりました。日本中東学会としては、これまでに引き続き、WOCMES Seville 2018 にもパネルを派遣する方針で準備に入りました。

2017 年 8 月末を締め切りとして研究発表グループを募集し、3 件の応募を得ました。2017 年 11 月の理事会で、それらの募集内容を精査し、参加希望グループにはさらに発表内容の充実・強化をお願いし、その要望に応じてくださった 2 つのグループを日本中東学会からの派遣とすることを決定いたしました。これらのグループは、それぞれ WOCMES Seville 2018 への参加を認められ、PA-004、PA-025 として登録されています。セッションの詳細は次の通りです。

PA-004 “Kurdish Studies in Japan”

組織者・司会：佐藤寛（日本貿易振興機構アジア経済研究所）

発表：

今井宏平（日本貿易振興機構アジア経済研究所）“Three-level Games in Turkey’s Kurdish Policies”

吉岡明子（日本エネルギー経済研究所）“Relationship of Kurdistan Region to Iraq: From Federation to Referendum”

Gunes Murat TEZCUR (University of Central Florida) “The Kurdish Question in Its Centennial: Democratic Struggles, Diplomacy, and Violence”

佐藤寛“Kurdish Problem in Japan”

PA-025 “Transnational Social Movements in and beyond the Middle East and North Africa and Their Dynamism”

組織者：鷹木恵子（桜美林大学）

司会：長沢栄治（東京大学）

ディスカッサント：Azadeh KIAN (University of Paris, Diderot)

発表：

小林和香子（日本ユニセフ協会）“Re-activating Transnational Grassroot Women Peace Movement in Israel and Palestine”

幸加木文（千葉大学）“New Phase of a Transnational Faith-based Civil Society Organization in and outside Turkey”

中西久枝（同志社大学）“Searching for Gender Equality in Iran’s Contemporary Women’s Social Movement: State Development Policies and Women’s Socio-economic Participation”

鷹木恵子“Transnational Peace Movement of the Tariqa al-Alawiyya and Its Philosophical Methodologies”

国際交流基金に「知的交流・会議助成」として資金援助を申請しましたが、残念なことに採択がかなわず、学会としては派遣を決定した2グループの旅費を援助するのみにとどめ、日本中東学会としてのブースの設置や JAMES パネルとして複数のセッションを一つにまとめることは見送ることになりました。

派遣援助を受けたセッションは、国際交流担当理事と協力して、『日本中東学会年報』の展示など、日本中東学会の広報活動の一部を担っていただくことになっています。日本中東学会の派遣計画とは別に参加を決定している他の日本中東学会会員にも、現地での協力をいただければと願っています。

WOCMES Seville 2018 のプログラムの詳細については http://wocmes2018seville.org/web/images/doc/programme/WOCMES_program_FINAL.PDF をご覧ください。

WOCMES Seville 2018 において、日本の中東研究者の能力とその研究成果を、国際的により広く示し、学術交流を深め、さらなる発展につながることを大いに期待されます。
(山岸智子 国際交流担当理事)

寄贈図書

【単行本】

柴田大輔・中町信孝編著『イスラームは特殊か：西アジアの宗教と政治の系譜』勁草書房、2018 年

末近浩太『イスラーム主義：もう一つの近代を構想する』岩波書店、2018 年

高橋典史・白波瀬達也・星野壮編著『現代日本の宗教と多文化共生：移民と地域社会の関係性を探る』明石書店、2018 年

原隆一・南里浩子編『大野盛雄フィールドワークの軌跡Ⅱ：1960 年代～70 年代のイラン・アフガニスタン農村調査から』大東文化大学東洋研究所、2018 年

メフディ・モザッファリ、鹿島正裕訳『イスラム主義：新たな全体主義』風行社、2018年
宮下遼『多元性の都市イスタンブル：近世オスマン帝都の都市空間と詩人、庶民、異邦人』大阪大学出版会、2018年
桃木至朗（監修）、藤村泰夫・岩下哲典編『地域から考える世界史：日本と世界を結ぶ』勉誠出版、2017年

【逐次刊行物・ジャーナル・その他】

『明日の東洋学—東京大学東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター報』39号、東京大学東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター、2018年3月
『日本クウェイト協会報 (Japan-Kuwait Society Bulletin)』239号、日本クウェイト協会、2018年2月
子島進編『グローバル化する難民問題：イスラーム教徒の視点から考える』（ACRI Research Paper Series 9）東洋大学アジア文化研究所、2018年
長谷部圭彦・三沢伸生・シナン・レヴェント編『オスマン帝国と日本：トルコ共和国首相府オスマン文書館所蔵文書に基づく両国間関係（早稲田大学史料展示会2017年）』（ACRI Research Paper Series 8）東洋大学アジア文化研究所、2018年

会員の異動

【新入会員】

足立真理

天野宏紀

伊東聰

岡部友樹

川向善基

鈴木健

時田祥弘

林田花枝

松木祐馬

松田和人

モハッラミプール・

ザヘラ

吉田智聡

Alena KULINICH

【所属・連絡先等の変更】

岩崎真紀

上山一

佐々木あや乃

鈴木啓之

ハガグ・ラナ

安田慎

山中達也

山本沙希

【2017 年度末をもって退会した会員】

稲見誉弘

遠藤直

河野敦史

是恒香琳

酒井ひとみ

柴田徳文

田中哲也

徳増公明

飛内悠子

古川ひとみ

向山裕子

連絡先をご存じないですか

下記の会員の方々は、連絡先が不明なため、学会からのお知らせなどをお届けすることができないでおります。連絡先をご存じの方は、学会事務局までご連絡いただけますよう、ご面倒でもご本人にお伝えいただければ幸いです。

相川洋介	穂山祐子	アレズ・ファクレジャハニ	
池田有日子	井上貴智	内田優香	大橋一寛
角田紘美	兼川千春	苅屋紀子	川畑亜瑠真
桑原尚子	清水順一	蔣旭棟	田中好子
千代崎未央	ディミタル・ミハイロフ・デイトロフ	戸塚邦子	
飛奈裕美	中島隆晴	仲田由紀美	中村亮
萩原優	波戸愛美	林真由美	速水美緒
番匠未来	福島康博	星光孝	宮崎正直
村上明子	餅井雅大	森岡知子	横田吉昭
レヴェント・シナン		Khalil DAHBI	
Mohammad Qasim WAFAYAZADA		Nouh Samir ABDEL HAMID	
Ratib MUZAFARY Tash MEHMET			

事務局より

今夏は例年になく酷暑となりましたが、皆様いかがお過ごしでしょうか。AJAMES 最新号 (34-1 号) の発送も夏前までに無事終わりましたが、2018 年度年会費未納により最新号をお届けできなかった方々も数多くおられます。ニューズレター年次大会特集号の印刷版の配布と同時に、総会時に予告した「矢のような催促」(!) 第一弾として年会費振込用の振込用紙も郵送いたしますので、未納の皆様におかれては速やかな納付を宜しくお願い申し上げます。

また、メーリングリストへの投稿に関して 1 点重要なお願いがあります。近頃大量のスパムメールがメーリングリスト宛に届き、対応に苦慮しております。サーバー元が提供しているスパム対策等も講じておりますが、効果は限定的であり、スパムにまぎれて皆様からの配信依頼を見落とす懸念が大きくなってきました。そこで、スパムメールと皆様からの投稿を仕分けし、配信依頼の把握をより確実にするため、投稿時に件名の冒頭に【配信依頼】の文言を付していただきますようお願いすることになりました。お手数をおかけしますが、ご協力のほど宜しくお願い申し上げます。(勝沼聡 事務局長)

編集後記

7 月中の刊行を目指した 152 号ですが、大会報告の執筆担当者が多数に上ることもあり、執筆依頼等に若干の手違いなどもあって、刊行が予定より遅れてしまいました。申し訳ありません。とくに、第 5 回中東研究世界大会 (WOCMES Seville 2018) 関連の記事は、同大会開催に先立ってご執筆いただいた記事を大会終了後に掲載することになってしまいました。執筆の山岸理事にも、会員諸氏にもお詫び申し上げます。第 5 回中東研究世界大会については、次号で大会報告を掲載の予定ですので、そちらを

楽しみにしていただけると幸いです。

会員諸氏におかれては、調査や論文執筆に精を出されておられることと思います。他方、今年は殊の外暑いかと思えば、豪雨や謎の経路をたどる台風など天候の不順も続きました。なかにはご自身やお身内、お知り合いが被災された方もおられるのではないかと案じております。私たちが研究対象とする中東も、相変わらず平穏とはいいたがたい状況に苦しんでおり、気の滅入ることも多い日々ではありますが、毎日の着実な歩みをもってこれに抗する以外の道はないかと存じます。禍福の綾に惑わされることなく、充実した初秋の日々を送られることを重ねてお祈り申し上げます。

(赤堀雅幸 ニューズレター担当理事)

日本中東学会ニューズレター 第 152 号

発行日 2018 年 9 月 11 日

発行所 日本中東学会事務局

印刷所 東洋出版印刷株式会社

日本中東学会事務局

〒108-8345 港区三田 2-15-45

慶応義塾大学文学部 勝沼聡研究室

E メール: james@james1985.org

<http://www.james1985.org/>

郵便振替口座：00140-0-161096(日本中東学会)

銀行口座：三井住友銀行渋谷支店(普)5346808
(日本中東学会)

ゆうちょ銀行口座：〇一九店(当)0161096
(ニホンチュウトウガクカイ)